

# 心ひとつに

東日本災害ボランティア「福岡大学派遣隊」

2011



## 目 次

○ 活動報告書を発刊するにあたって .....	責任者（学生部長） 小野寺 一 浩	1
○ 派遣隊のもたらしたものとその先にあるもの .....	隊 長（理学部学生部委員） 杉 山 哲 男	2
<b>1</b> 派遣隊の活動概要と参加者名簿 .....		3
<b>2</b> 募集から活動報告まで .....		6
募集告知 .....		6
募集説明会 .....		6
事前研修会（全6回） .....		6
結団式 .....		8
出発前準備 .....		8
被災地での活動 .....		9
活動報告会 .....		9
<b>3</b> 被災地での活動内容と学生レポート .....		10
1号車 陸前高田市 .....		10
2号車 気仙沼市・石巻市 .....		21
3号車 石巻市 .....		32
1～3号車 南三陸町上山八幡宮 .....		41
2・3号車 学生交流（石巻専修大学） .....		42
派遣隊が行った学内募金の活用について（報告） .....		43
引率者レポート .....		44
<b>4</b> 派遣隊の活動に関するアンケート調査 .....		47
<b>5</b> 活動で出会った方々からのメッセージ .....		59
○ 派遣隊にご支援、ご協力いただいた方々 .....		
○ 謝辞 .....		

# 活動報告書を発刊するにあたって

責任者（学生部長） 小野寺 一 浩

福岡大学派遣隊は、2011年8月25日、無事、宮城県・岩手県でのボランティア活動を終え、福岡に帰つてきました。

派遣隊の結成は、3月11日の東北大震災発生後、学生から、「被災地の支援をしたい」、「現地に行き被災者の力になりたい」という申し出があったことに始まります。東北地方で起きた大震災を自らの問題として捉え行動を起こしたいという学生の熱意は、大学教育に携わる一員として嬉しい限りでした。しかし、被災地の正確な状況も分からぬまま、現地に学生を送り出すことは、安全面において不安があると同時に、現地での活動が逆に被災者の援助に役立たぬばかりか阻害することになるのではないかという危惧もありました。そこで、事前の準備を行ったうえで、夏休みに現地へ派遣することにしました。

派遣隊の募集説明会を、5月11日に行い、震災発生から幾分時間が空いたものの、学生の熱意は薄れることなく、ほぼ100名が参加しました。大学としては、当初30名程度学生の派遣を予定していましたが、この説明会において、学生の真剣な姿を目にし、予定を変更し希望者全員を派遣することにしました。

大学からは交通費および宿泊費の支援とし、それ以外はすべて学生が主体的に行う、大学は学生の活動をサポートするだけであるという方針で事前準備は進められました。まずはグループ毎にテーマを設定し、学生ならではの手段を用い情報収集を行い、現地での具体的な状況をイメージし、活動計画を策定していきました。その間、臨床心理士の講義を聴くなど、現地で活動するためのスキルも修得するよう努めました。

このような事前準備をして現地に赴きましたが、被災地の状況を目の当たりにし、イメージとのギャップを多くの学生が感じ、また、活動内容も学生の想定とは異なることもあります。ただ、派遣隊の心得としていたのは、我々から恩恵を与えるのではなく、被災者の方の気持ちを理解し支援しようということでした。現地でその想いを受け止めようと真剣に被災者の方のお話を聞き入っていた、学生の姿を忘ることはできません。

まだまだ、改善すべき点はあるものの、全員の精力的な活動により、今回の派遣隊は被災者支援の一助となると同時に、人間的成長という点でも有意義なものであったと思われます。

最後に、派遣隊の準備を進めるにあたり、各方面の方にお力添えいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

# 派遣隊のもたらしたものとその先にあるもの

隊長（理学部学生部委員） 枚 山 哲 男

今回の学生・職員を含む104名の派遣隊全員が、事前準備、現地での活動、被災者とのコミュニケーションなどを通じて、見聞きし、体験したことは、結局「人はどう生きるのか」ということに尽きると思います。家族を失い、生活を失い、破壊された地域社会をどう立て直し、復旧・復興するのか、それに被災者個人、家族、コミュニティはどう取り組むのか。およそ1,000km以上離れたところで暮らす私たちは、それをどう支え、今後もどうかかわっていくのか、全てはこれから私たち一人ひとりの「生き方」の問題になるという気がします。

福岡大学の建学の精神は自己研鑽を旨としています。しかし人は独りでは生きていけません。自己研鑽と同時に、他者とのかかわりを保ち育てる力も磨かなければなりません。ボランティア活動とはまさに自分の余力を無償で他者のために使うことであり、活動を通じて人と人の「絆」や「かかわり」を深めることだということがわかりました。この報告書に記載された派遣隊員の多くの声がそれを物語っています。今回の活動によって、福岡大学派遣隊は第一歩を踏み出したところです。活動に参加した全員が、「忘れないでほしい」という被災者の声を胸に、さらにこの経験を周囲に伝え、次の活動につなぐよう努力したいと考えます。



学生部長挨拶（8月19日）



隊長挨拶（8月19日）



福岡大学派遣隊

## 1

## 派遣隊の活動概要と参加者名簿

## 1. 概要

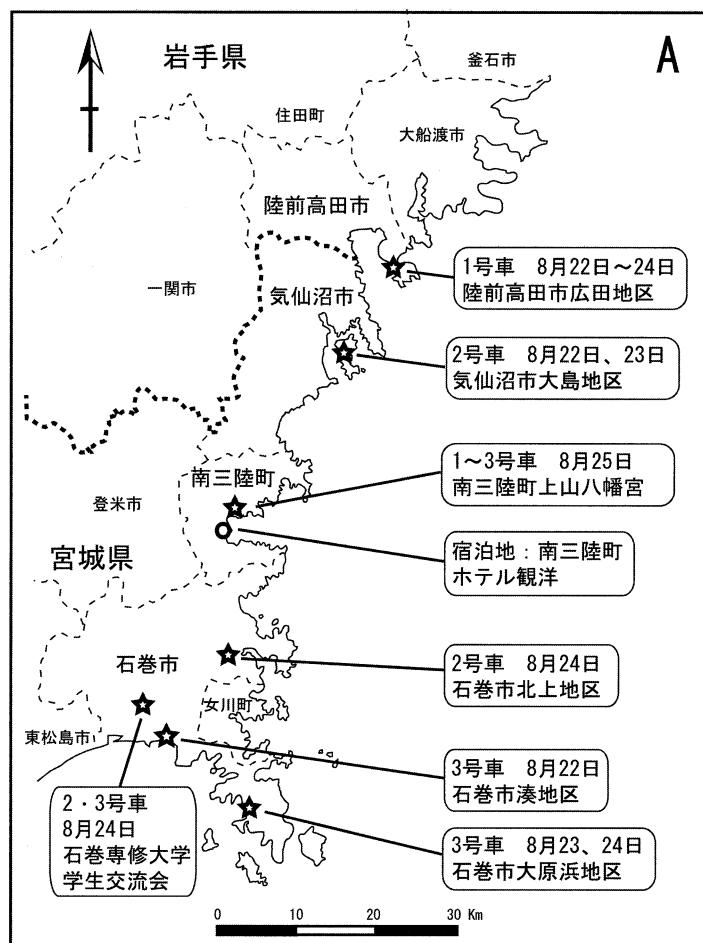
派 遣 期 間 2011年 8月21日(日)～8月25日(木)

派 遣 人 員 総勢104名 (学生93名、教職員10名、本学卒業生の消防士1名)

派 遣 先  
 ・岩手県 陸前高田市  
 ・宮城県 気仙沼市、石巻市、南三陸町  
 (羽田空港からバス3台で約8時間かけて現地入り)

活 動 内 容 田畠の瓦礫撤去・分別、家屋の清掃、除草など (石巻専修大学の学生交流も含む)

## 2. 活動場所



### 3. 活動行程（号車ごとの活動場所）

	1号車	2号車	3号車
8月22日(月)	陸前高田市広田地区	気仙沼市大島地区	石巻市湊地区
8月23日(火)			石巻市大原浜地区
8月24日(水) 午前		石巻市北上地区	
午後		石巻専修大学との学生交流会	
8月25日(木) 午前	南三陸町上山八幡宮境内		

#### 【活動内容】

- ・陸前高田市：田畠の瓦礫撤去、除草作業
- ・気仙沼市：主に個人宅の片づけ、清掃作業
- ・石巻市湊地区：水産加工場の復旧作業
- ・石巻市北上地区：田畠の瓦礫撤去
- ・石巻市大原浜地区：住宅地の側溝清掃
- ・南三陸町：瓦礫撤去

### 4. 参加者名簿

#### (1) 学生内訳（学部・学年・男女別）

【学生】 93名

学年 学部	大学院			4年			3年			2年			1年			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
人 文	1	0	1	0	1	1	1	4	5	2	1	3	0	2	2	4	8	12
法	0	0	0	4	3	7	7	0	7	5	2	7	0	1	1	16	6	22
経 済	0	0	0	0	2	2	0	1	1	11	1	12	0	1	1	11	5	16
商	0	0	0	2	2	4	2	2	4	2	4	6	0	2	2	6	10	16
商 第二部	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0	4	4
理	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	2	1	3
工	0	0	0	2	0	2	6	0	6	0	0	0	3	0	3	11	0	11
医	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	2	2
薬	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
スポーツ科	0	0	0	1	0	1	3	0	3	2	0	2	0	0	0	6	0	6
合 計	1	1	2	9	9	18	19	12	31	23	8	31	4	7	11	56	37	93

## (2) 学生名簿（号車ごと学部別）

## 【1号車】(30名)

氏名	学部	氏名	学部	氏名	学部	氏名	学部
高橋 奈穂	LC	○ 永田 裕平	JJ	白井沙耶香	EE	○ 岡村 治朗	TL
今徳まりな	LC	◎ 野崎祐太朗	JJ	大崎 愛子	CC	横尾 溪樹	TM
門脇 瀬里	LC	増田 良太	JJ	谷崎すずな	CF	手塚 祥恵	MM
大川 泰史	LC	◎ 津秋 寛之	JJ	東津 咲紀	CF	植村 陽菜	PP
芦谷 将徳	LD	江口 征隆	JJ	上原 伊代	CF	那須野宏紀	GH
森 寿治	LF	兼城 力也	JJ	○ 森高 麗菜	BB	小田宗一郎	GS
古庄 真己	JB	高松 龍也	EE	内田 彩	BB		
寺原 未樹	JB	◎ 武藤 良介	EE	原口 拓也	TL		

## 【2号車】(35名)

氏名	学部	氏名	学部	氏名	学部	氏名	学部
大隈 路恵	LE	大久保綾華	JJ	○ 江藤 俊	CB	○ 毛井 貴彦	SM
宇梶 花乃	LF	田中 遼平	EE	古賀陽登美	CC	◎ 近藤 俊輔	TC
松岡あかね	LP	木村真理子	EE	関 天舟	CC	阿部 裕樹	TL
田中 大樹	JB	○ 福重 達也	EE	石川 健一	CC	渡邊 雄希	TL
○ 俣江さおり	JJ	清田 直人	EE	○ 江原 早織	CC	中村 彰一	TM
前畠 明美	JJ	中村 駿太	EE	○ 栄楽 勇紀	CC	○ 高岡 千容	MM
亀崎 大介	JJ	漆下 由貴	EI	鍋山 ゆり	CF	和合 謙介	GS
○ 小嶋 洋平	JJ	石塚 幸人	EI	三原 智子	CF	新開 曜規	GS
園田 匠平	JJ	八尋 政哉	EI	岡崎衣里子	BB		

## 【3号車】(28名)

氏名	学部	氏名	学部	氏名	学部	氏名	学部
田宮 正基	LH	永野俊太郎	JJ	中尾 壮志	EI	○ 豊永 卓矢	SM
平田 香純	LJ	◎ 土橋 亮太	JJ	○ 山下 諒	CB	塚崎 雄介	TC
澤山 夏希	LP	○ 明石 浩靖	JJ	○ 田畠 信弥	CB	谷 祐太朗	TC
宮澤 寛享	JB	前川 広恵	EE	宮口佳代子	CC	吉村 淳史	TC
池松龍ノ介	JB	光安 千央	EE	月野 愛美	CF	焼山 健瑛	TC
倉内 愛子	JB	花田 真樹	EE	川上 理沙	BB	○ 深野木 渉	GS
井手 博美	JJ	原 孝寛	EI	西山 明子	SD	後口 成就	GS

※ ◎はリーダー、○はサブリーダー

## (3) 引率者 11名

## 【職員引率者】 10名

- 責任者 小野寺 一浩（学生部長）  
 隊長 枚山哲男（理学部学生部委員）  
 看護師 本垣内くみか（福岡大学病院7階病棟）  
 　　深山可奈子（福岡大学病院ハートセンター）  
 　　加藤和恵（福岡大学筑紫病院3階南病棟）  
 臨床心理士 妹尾奈津子（ヒューマンディベロップメントセンター）  
 学生課 川口修一（課長補佐）、古川智実（課員）、野田堅三（課員）  
 広報課 重富洋二（課長補佐）

## 【外部引率者】 1名

- 森田浩章（西消防署警備課、商学部第二部卒）

## 2

## 募集から活動報告まで



4月7日	<b>募集告知</b> 福岡大学東日本大震災支援対策本部から学生ボランティアの募集を告知した。	夏季休業中に、スポーツ、学術文化等で被災された方々を勇気づけることができるような活動や、被災者の生活支援活動（運搬、清掃等）に参加することを検討している学生、および公認団体を募集した。
5月11日	<b>募集説明会</b> 	震災から2ヶ月。福岡大学派遣隊として被災地で活動する隊員の募集説明会を行った。自分の意思で集まった学生達は経験者であるスポーツ科学部4年次生落合春陽さんから被災地での活動状況について報告を受けた。また、派遣隊の活動概要や参加条件、留意事項など、事前に知っておかなければならぬことが話された。この日集まった学生は100名を超えて、募集定員の30名を大きく上回った。
5月18日	<b>事前セミナー</b> 	事前研修会をスタートする前に、あらためてボランティア活動保険の申込要項、被災地でのボランティア活動について工学部3年次生岡田進之助さんと同学部4年次生中堀祥太さんおよび本学卒業生の西消防署警備課森田浩章さんから報告を受けた。また、希望者全員を派遣することを発表した。 その後、複数のグループに分かれて「ボランティア活動で大切なこと」について、初めてのグループワークを行い、結果を発表し合った。
6月3日	<b>第1回事前研修会</b> 	募集説明会を終え、派遣隊に申し込んだ学生達は被災地での活動に向けて6回の事前研修を受ける。この日第1回目の研修会では、大和副学長や萩山派遣隊隊長の挨拶、ボランティア活動保険や今後のスケジュールについて説明の後、隊員を10のグループに分け、初めて顔を合わせる仲間と自己紹介を交えつつ活動候補地等、次回の研修会までに話し合うテーマ等を決定した。

6月14日	<b>第2回事前研修会</b> 	東北に行くことは決まったが、現地の詳しい状況はほとんどわからない。第1回の研修で挙がった活動候補地の被害状況や交通手段、宿泊施設、また、ボランティア活動及び募集状況についてグループごとに自分達で情報収集し、まとめた内容を発表した。積極的にすすんでリーダーシップを取る姿や意見が活発に飛び交う様子から、学生達の意識の高さが伝わってきた。さらに活動候補地の絞り込みを行い、陸前高田市、南三陸町、石巻市、東松島市、仙台市の5つを候補地とすることが決定した。
6月28日	<b>第3回事前研修会</b>   	福岡県警察本部総務課友田宮子さんから、被災地でボランティアを経験された女性の立場から貴重な話を聞いていただき現地での活動をまとめたDVDでの説明があった。ありのままの活動報告を目の当たりにし心をうたれるとともに、あらためて「福岡大学派遣隊」はこれまで以上に気が引き締まった。 その後、グループ発表に移り、調べた内容をレジュメにし発表した。前回の発表では不十分だった箇所が、各班ともより詳しく調査できており、新しいメンバーともしっかりととしたコミュニケーションがとれていて内容も充実し、現地で必要な情報や知識が分かり、少しづつ事前研修が実を結びつつあることを感じた。 また、枚山隊長から被災地での事前調査の報告があり、活動候補地のボランティアセンターのニーズが良く分かった。その報告や各グループからの情報収集の結果から、予想されるボランティア活動の内容は体力系、プログラム系、専門系の3つに分けられた。しかし、専門系は学生には難しいので、今回は体力系、プログラム系を担うことになり、あらためて新グループの入れ替え等を行い、今後はこの2グループで最後まで活動していくことを確認した。 宿泊施設については、「南三陸ホテル観洋」が全員を受け入れる規模であり、本学も前向きに検討中との報告を受け、徐々に被災地へのアクセス方法や宿泊施設の決定が現実化してきた。
7月15日	<b>第4回事前研修会</b>  	これまでの研修では毎回グループを入れ替え、テーマ別に話し合ったものを次の研修会で発表する形をとってきたが、前回の研修会で実際に現地で活動する体力系とプログラム系のグループに分かれて4回目の研修を迎えた。最初に人文学部教育・臨床心理学科林幹男教授から、被災地の方と接する上での注意点について講演をいただいた。自分達が良いことだと思っても相手にとってはそうでないこともあります、単にコミュニケーションをとるだけではなくその通り方についても学んだ。 次に、学内での募金活動について、担当者から実施要領の説明・提案があり了承された。また、石巻専修大学学生ボランティアとの交流内容について担当者から意見が求められた。さらに、翌日開催予定の結団式および懇談会の式次第やその準備について説明があった。最後に、健康管理センターの協力により、事前に隊員の健康状態をチェックするため問診票の提出を求めた。

7月16日	<b>結団式と懇談会</b> 	<p>私達に一番必要なもの。それは心をひとつにすることである。学長や学友会の学生代表から激励および募金の寄託を受け、派遣隊の学生代表による決意表明を聞き、皆の気持ちが引き締まった。</p> <p>また、宮城県仙台市から庄司ご夫妻を招き、被災地の現状や全国からのボランティア支援について貴重な話をうかがい、大変参考になりありがたかった。結団式後は場所を移して懇談会を行い、事前研修とは違った交流により隊員間の親睦が深まった。</p>
7月19日 ～ 25日	<b>出発前準備として学内募金活動</b> 	<p>東日本災害ボランティア「福岡大学派遣隊」の結成後も、隊員一同、被災地の情報収集はもとより、自分達ができるることを考え活動準備を進めた。その中で、被災者や被災地が必要としている物品を購入するため、募金活動を行った。</p> <p>目的：現地で不足している物品だけでなく、子ども達やお年寄りとのコミュニケーションを図るためにグッズなどを購入する。</p> <p>期間：7月19日(火)～25日(月)</p> <p>時間：8時30分～8時50分、12時10分～12時50分</p> <p>場所：学生課・正門・オアシス周辺</p>
8月4日	<b>第5回事前研修会（学外清掃）・懇親会</b> 	<p>初めて全隊員によるボランティア活動の実践訓練を行った。暑さ対策（体力・服装など）や派遣隊員の結束を高めるという目的で、4つのルートに分かれて大学周辺地域の清掃活動を行った。猛暑での水分補給や休憩を取ること、お互いに声を掛け合うことの大切さを学んだ。また、回収後分別したゴミの多さにあらためて驚いた。</p> <p>清掃活動後は、全員で懇親会を行い、暑さに解放されリラックスした雰囲気で、隊員同士のコミュニケーションを図った。</p>
8月10日	<b>救命救急講習</b> 	<p>福岡市消防局の消防士有志のご指導により、救命救急講習を行った。この講習では、主に心肺蘇生や事故に遭遇した際の対処法などを学んだ。自由参加ではあったが、50名近い隊員と教職員が参加した。複数のグループに分かれて消防士の方から倒れている人への状況判断や周囲へ助けを求めるための声のかけ方、AEDの使い方などを一つひとつ丁寧に教えていただき有意義な時間を過ごすことができた。被災地での活動だけではなく、日常生活における緊急事態にも十分役に立つことを確信した。</p> <p>後日参加者には普通救命講習修了証が授与された。</p>
①7月11～ 15日 ②8月8～ 12日	<b>破傷風の予防接種</b>	<p>福岡大学病院の協力により、隊員の予防接種を行った。</p>

8月19日	<p><b>第6回事前研修会・ハンドブックの配布</b></p>  	<p>最後の研修で、派遣行程や持参物、注意事項等、活動に関する最終確認を行った。ボランティアの心得として、相手の気持ちを尊重し、依頼者の気持ちに寄り添って活動することが大切だということを、再確認した。また、第一薬科大学付属高等学校およびRKB毎日放送株式会社から団扇を、有限会社九州ヘルメット工業所からヘルメットの寄贈を受けた。活動目的、ルール、行程、活動前や活動中の心得、注意事項など記載した「ハンドブック」を学生が作成し、全員に配布した。</p> <p>研修会終了後、各人の持ち物や事前にホテルへ送付する物などをお互いに確認し合い直前まで準備を進めた。</p>
8月21日 ～ 25日	<p><b>被災地での活動と学友会義援金の寄託</b></p>  	<p>活動初日、学生部長と学生代表が、株式会社河北新報社（写真左上）および株式会社岩手日報社（左下）を訪問し、全学友から集まった義援金、それぞれ45万円を寄託した。</p> <p>南三陸ホテル観洋を宿泊場所として、毎日3台のバスに分乗し、陸前高田市、気仙沼市、石巻市で活動した。</p> <p>最終日は全員で南三陸町内での活動後帰福した。また、活動期間中、半日だけではあったが、石巻専修大学の学生ボランティアと交流した。</p> <p>なお、被災地での活動内容については、<b>3 被災地での活動内容と学生レポート</b>で報告する。</p>
9月21日	<p><b>活動報告会（60周年記念館ヘリオスホール）</b></p>  	<p>事前研修会から派遣、帰福までをビデオ放映後、学生から号車ごとに分かれて具体的な活動報告、および学生代表から義援金の寄託報告を行った。最後に、今回派遣隊の一員として参加していただいた森田氏へ学長から感謝状を贈呈した。会場内には、活動写真のパネル展示を行った。</p> <p>報告会には派遣隊だけでなく、一般学生も多数出席し、被災地で見てきた現状を「伝える」という、福岡大学派遣隊のこれから役割の第一歩を踏み出すことができた。</p>

### 1号車 陸前高田市

私達1号車は岩手県陸前高田市広田町で3日間、ボランティアセンターから依頼された土地の瓦礫撤去と清掃を行った。

作業開始時は一帯に雑草が生い茂り、瓦礫も散乱していたが、依頼者の希望にそえるように自分達でやり方を考え、助け合って作業した結果、ほんのわずかではあったがきれいにすることができた。

活動2日目には、近くに住む佐藤さんご夫妻にお話を伺う機会があり、震災当時の話や現在の生活状況などについてお尋ねした。高齢化が進む広田町で土地の清掃を住民の方が行うことは大変な作業で、そのことに力を貸してくれる大学生がいることがとてもありがたいと感謝いただいた。また、偶然同じ地区で活動していた金沢大学の学生ボランティア団体の方々と同じ想いを抱く仲間として交流ができた。

その後、私達は陸前高田市で2番目に大きい仮設住宅を訪れ、ここで被災された方々とお話をする機会を得た。皆さんは「この震災を風化させないで欲しい」と日々に仰っていたことが心に残った。

最終日の活動終了後、佐藤さんや応援に来てくださった広田町の区長さんを交え、メンバー全員で集合写真を撮り3日間の活動を終えた。

今回の活動を通じてこの経験を周囲に伝えること、現地で出会った方々と今後も何らかの形で関わりを持とうと思ったことなど、ほんの些細なことでも現地の方々にとっては、とても嬉しいことであることを学ぶことができた。そしてそれは、同時に私達にも出来る事であり、その重要性を強く感じた。



金沢大学学生ボランティアとの交流



佐藤栄蔵さんから貴重な話を伺う



瓦礫の撤去や除草作業を行う



仮設住宅に住む方々との交流

## ◆学生レポート◆

### 1 号 車

---

#### 高橋奈穂（人文学部文化学科）

私はこれまでボランティアの経験がほとんどありませんでしたが、テレビで流れる衝撃的な映像と親戚が実際に被害に遭ったという理由から参加しました。

最初は知らない者同士だった私達も何度も話し合いを重ねて結束力を強め、その結果とても良い形で活動できたと思います。また被災地の方々のお話を聞いた際にも人ととの繋がりがどんなに重要なことが改めて実感させられました。人との繋がりは災害時に限らず生きる上で必要不可欠であり、このボランティアもそれなしでは実現できなかつたはずです。今後もこのボランティアで得たものを無駄にせず今まで以上に人との繋がりを大切にしたいと思います。

#### 今徳まりな（人文学部文化学科）

3月11日の出来事を、私は海外研修中だったためオーストラリアのニュースで初めて知りました。ニュースで見る映像はまるで映画のようで、これが日本で起きているなんて信じられなかったのを覚えています。派遣隊に参加し、実際に自分の目で見た現地は、テレビで見る光景とは全く違う生々しさがあって言葉が出ませんでした。

瓦礫の山とその間に咲く向日葵を見て、来年の夏ここはどうなっているのだろうと考えさせられました。2011年。今年は歴史的な事件や災害が立て続けに起こり、多くを失った年でした。

皆それぞれ感じることがあったと思います。そのことを忘れずに、風化させないようにすることの大切さを改めて感じました。また参加したいです。



無事活動を終え、佐藤さんと広田地区の区長さんと共に全員でガツツポーズ

### **門脇瀬里（人文学部文化学科）**

私は岩手県陸前高田市でボランティアに参加しました。宮城から陸前高田に行くまでのバスの移動中被害にあった街を見ました。現地へ行く前にテレビ等のメディアで見ていたのでものすごい衝撃を受けたわけではありませんが、がれきの山を見た時はやっぱり驚きました。実際に見て、地震、津波の恐ろしさ、大きさや強さは本当にはかりしれないと強く感じました。流されているコンクリートの塊や、ぐしゃぐしゃになった車の現物を見て、こんなものが波と一緒に流されてくると思ったら、本当に恐ろしく感じました。現場を見て、改めてその時の恐ろしさや、あの地震、津波の恐怖は何も体験していない自分に想像できるものじゃないと思いました。本当に起きたことだとは考えづらいと正直感じました。現場を見て、考えるだけで涙が出そうでした。

仕事内容は、始めはやりがいを感じられずにいましたが、ボランティアについて学び、心を込めて、かつ楽しみながら出来ました。被災地の方に話を聞き、「ありがとう」と頭を下げられた時は、本当に涙が溢れました。

別行程となった為、石巻専修大学の方々の話を直接聞くことができなかったのが、とても残念で仕方なかったです。

### **大川泰史（人文学部文化学科）**

私が現地で特に印象に残っていることは現地の風景、現状でした。5ヵ月経過したとは思えないような、がれきなどが残っている現状に改めて津波の被害の大きさを感じたことに加え九州に住んでいる自分の感覚、生活の差、また、少しずつ被災地のことが風化していることにショックを受けました。この現地の状況や現地の声をいかに帰って伝えることが大事であるかと活動しながら思いました。

今回の活動で変わったことは被災地と自分の距離感です。今までニュースや新聞に被災地が取り上げられたときに漫然と見ていたのが、現地の人はどうだろうか、活動した場所はどうだろうかという感覚になり、ぐっと身近に感じるようになりました。

### **芦谷将徳（人文学部人文科学研究科教育・臨床心理専攻）**

私は岩手県陸前高田市で活動し、主な作業としては田んぼの土地の草むしりとガレキの撤去でした。震災が起きて約5ヵ月が経過していたのでガレキ撤去と言われた時に「重機がやっていてもまだ終わってないのか」というのが私自身の正直な感想でした。しかし、作業を進めていくと窓ガラスや先程まで使われていたような茶碗、泥だらけの子ども服や写真など「ガレキ」とはとても言えないような、現地の方にとっては宝物とでも言うべきものが見つかり、手作業でなければ撤去できないものが沢山あることに気づきました。そして次第に「終わっていなくて当然だ」という思いに変わり、現地は人手不足であるという事を痛感させられました。

### **森 寿治（人文学部フランス語学科）**

私は今回のボランティア活動を通じてある義務感を覚えました。それはこの経験を今回で自己完結するのではなく、次に繋げるための礎とすることです。具体的には先日の報告会のような催しを各地で行わせていただけけるよう交渉をすることや、私達自身が口伝えで友人などに伝えていくことなどです。それは一

人では微力な私だけの話ではなく、福岡大学派遣隊のメンバー全員がそう意識することでそれは大きな力となり、今回の災害の風化を抑えることに繋がります。

また、この報告書を読み、少しでも私達の思いを感じて下さった方々にお願いがあります。この冊子を周りの方々に回してあげて下さい。一人の小さな努力がやがて大きな力を生み、それが現地の方々の大きな支えとなります。

### 古庄真己（法学部経営法学科）

参加した理由は、この事実が自分や社会の中で忘れられていく事に恐怖を感じたからです。実際に現地の状況を目にした時、震災から5ヵ月経っているのにまるで最近の事のように感じられました。同時に少しでも被災地に貢献したいと思いました。何より被災地の方々の強さに感動しました。前に進もうとする気持ちがこちらにも伝わってきて、心にグッとくるものがありました。活動中、被災地の方に「助かります。ありがとう」と言われた時、ボランティアは求められており、ちっぽけな自分という存在が必要とされていることが素直に嬉しかったです。今回のボランティアで人として成長できました。今後もこのような活動を続けていくつもりです。

### 寺原未樹（法学部経営法学科）

私は、被災地の現状を自分の目で見てみたいという単純なきっかけだった。実際に訪れ、想像以上に復興していない被災地を目にした時は言葉にできなかった。今までどこかで他人事だと思っていた自分がいたのかもしれない。ボランティアに参加し、現状を見て、現地の方の生の声を聞き、私達にできることはないだろうかと改めて実感した。これから長い目で東北を復興させなければならないのではないだろうか。そして、1番に伝えなければならないことは「忘れないでほしい」ということだ。未だ苦しんでいる方はたくさんいるし復興していない土地はあふれている。小さなことでもきっと復興の糧になると信じ、これからも活動を続けていきたい。

### 永田裕平（法学部法律学科）

3月11日テレビで震災の様子を見た。当時、毎日ニュースを見ていて、地震のすごさを痛感していた。しかし、ある番組で被災地の子どもが笑っていた。その時、私は、被災地に行き1人でも多くの人々と会って笑顔にしたいと思った。偶然学内で被災地のボランティアの募集をしていたことを知り、説明会に行き応募した。

被災地に行き2日目。作業する初日、バスで移動している時、ふと、外の景色が変わった。それはテレビで見ていた、壊滅状態の町だった。私は、啞然とした。信じられなかった。私がみんなに1番伝えたいことは、「自分の目で生の被災地を見てほしい」ということだ。

### 野崎祐太朗（法学部法律学科）

“復興”とは何か。現地に赴く前からこれについて考え、帰ってきた今もその答えは見出せていない。

ただ、現地で活動した私達が今すべきことは、もう一度現地で活動することではなく、この経験を福岡から外へと発信していくことではないだろうか。風評被害をおこさないためにも正しい知識と情報を効果

的な方法で発信していくシステムが必要だと考える。思い立ったが吉日とは言うが、もう一度“復興”というものと向き合い、満を持して行動していくべきではないか。

遠く離れた九州からでもできることを一つずつ確実に行っていくために、これから先もそのことを考えて活動を継続していきたい。

### **増田良太（法学部法律学科）**

今回東北での活動で一番印象に残っているのは、バスの窓から見えた風景です。横たわった電柱、畑に打ち上げられた車、止まった信号、一階のない建物、途切れた線路や橋、そこには同じ日本とは思えない光景が広がっていました。東北では、瓦礫撤去、除草作業、現地の人の話を聞くなど様々な活動を行いました。そこで学んだのが、前を向いて進むことの大切さ、人と人とのつながりや絆、物事を深く考えることの大しさなどです。瓦礫撤去だけをしてボランティアは終わりではありません。現地の情報を各地に持ち帰って、発信していくことが僕たちの使命なんです。皆一人ひとりが手をつなぎあって、協力して、日本を盛りあげましょう!!

### **津秋寛之（法学部法律学科）**

今回の活動を通して言いたいことは、機会を与えてくれた大学に感謝したいです。今回のような形で東北に行けるとは思ってなかっただし、多くの人々と関わることができました。災害ボランティアとして活動したのは初めてで、ボランティアの知識はもちろんのこと、積極性や協調性、判断力など、今後の人生に活かせることも身につきました。また、反省点として、自分の行動が普通過ぎたというか個性が弱かったことです。今回は約100人の学生で活動しましたが、終わってみれば自分は100人の学生のうちの1人でしかなかったように思います。周りに合わせることも必要ですが、良い意味でも悪い意味でも自分っぽさをもっと出せたらよかったです。

### **江口征隆（法学部法律学科）**

メディアで取り上げられている被災地の惨状は私にとってテレビの向こう側の世界でしかなく、東北に行き、初めて「ここまでの大災害だったのか」実感できたように思います。私達にできる事などほんの微々たるものしかありません。しかしその少しでもできることが重要なのだと私は思いました。被災地の方々が口を揃えて言っておられたのは「この災害を、悲しみを風化させないで欲しい。忘れないで欲しい」ということでした。実体験ではないにしろ、私達が東北の地で知ったこと、学べたことは途方もなく大きなものです。伝えていく義務と責任を自分自身に課してこれから的生活をまた深く考えねばならない、と思うと共に、平凡である日常の有り難みを感じた体験でした。

### **兼城力也（法学部法律学科）**

私は、今回の活動を経て、ひとりの力はほんの僅かであるが「やるとやらない」では大きな差があることを感じた。1号車の活動は畑のがれき撤去、草刈りでした。1日目は作業の効果は見えなかつたが日を重ねるうちに次第に刈った草、がれきが山として積もるのを見て「やっていくうちに次第に結果は出る！」と思えるようになった。何事にも、一歩を踏み出す勇気を持つことが大切で、今回はそれができた。また、

人と人の繋がりにより人生において貴重な友ができた。

今後、この経験を活かし大学生活、就職活動、サークル活動においても積極的に取り組み自分自身を高めていきたい。来年も派遣があることを強く望んでいる。

### 高松龍也（経済学部経済学科）

私がこの東北ボランティアに参加した理由は、TVの報道で見た現地の状況だけが全てではなく、その一部分だけしかないと思ったからです。また、実際に自分で足を運んでTVとは違う視点で現地の状況を知り、その上で自分に何ができるかを知り、被災者の方々の手助けになることがしたかったからです。東北でボランティアをしてみて、ボランティア活動をするための道具などが不足しており、かつ資金が不足していることを痛感しました。

また、仮設住宅にもお邪魔させてもらい、現地の方々の話を聞いて、改めて津波の恐ろしさを知りました。

現在、東北でボランティアをする人は足りていません。私は、このボランティアでの経験を周りの人々に伝え、東北でのボランティアの重要性を知ってほしいと思います。

### 武藤良介（経済学部経済学科）

今回の活動で最も考えたことは、政治についてです。現地の方々は、自分達の生活を取り戻そうと必死で頑張っています。多くのボランティアも同じです。しかし、自分達で行えることには限界があります。最終的には、やはり政治の力が必要なのだと感じました。多くの日本人は「復興」を考えるとき、現地の人の生活を元に戻すということを考えると思います。確かに、そのことも大事なことですが、復興という長いスパンで考えると必ず政治の話になるので私達は、日頃から政治について考えなければならないと思いました。自分達で自分達の社会を作っていく、変えていくという意識。若い我々世代が動いていく必要があると思います。

### 臼井沙耶香（経済学部経済学科）

私は今回少しでも何か役に立ちたい、そして現地の状態を自分の目で見て現状を知りたいと思いボランティアに参加しました。

実際に現地に着くとテレビで見るような瓦礫の山があたり一面に広がっていました。ここでたくさん的人が命を落としたんだと思うと言葉が出ませんでした。また、現地の方の生の声を聞くことができる機会もありました。私が復興のために今後も出来ることはこの体験を周りに伝え風化させないことなんだと実感しました。

今振り返ってみて、とても貴重な体験ができた夏休みになりました。「福岡大学派遣隊」として参加して本当に良かったと思っています。

### 大崎愛子（商学部商学科）

東日本大震災以来、私は募金活動だけではなく被災地に何か直接的な貢献をしたいと考えていたので、大学で派遣隊を結成することを知った時、迷わず参加しようと決意した。そして当日、現地を走るバスか

ら見えたのは瓦礫の山や崩壊しかけた建物がどこまでも続く、凄惨な光景だった。予想を遥かに超えたその光景は、見る度に愕然とした気持ちを私の心に植え付けていった。そのような状況の中で私の心を支えてくれたのは、人々の「笑顔」だった。現地で暮らす方々や仲間である派遣隊員が見せる朗らかな笑顔は、私を幾度となく元気づけてくれた。その記憶を忘れずに、私は自分の見たことや感じたことを未来に語り継いでいきたいと思う。

### 谷崎すずな（商学部貿易学科）

被災地の方から、「遠くから来てくれるだけで、忘れられないんだなと勇気をもらえる」「本当にありがとうございます。来てくれてありがとう」という言葉をいただいた時、行く前に抱えていた不安が全て消えました。

お金では支援できない仕事、人の手で真心を込めて作業してほしい場所、それをお手伝いするのがボランティアだと知ることができました。ボランティアは自己満足とも言われますが、どこかで私達の活動を喜んでくれる人がいます。忘れてはいけないのは「ボランティアさせてもらっている」という気持ちです。してあげているのではなくさせてもらっている。そういう気持ちで多くの人が協力することがこの震災の復興に必要だと思います。

### 東津咲紀（商学部貿易学科）

私がなぜ今回この東日本災害ボランティア福岡大学派遣隊に参加したのかというと、やはり1000年に一度の未曾有の災害跡地を一目見ておきたかったからです。実際現地に立ち、被災状況を目の当たりにし、まず感じたことは日頃メディアから報道されている映像との違いです。臨場感の一言だけでは説明のつかないくらいの衝撃を私はそこから受けました。

復興はまだ終わっていません。今回の活動を通し、一人の力ではできないことも皆で一つになれば可能になるということを学びました。

最後に、今回私達にこのような活動の機会を与えてくれた福岡大学職員の方々と、“いくJ”リーダー野崎さんに厚くお礼を申し上げます。

### 上原伊代（商学部貿易学科）

地震が起きた3月11日に私はテレビの速報で地震があったことを知りました。いつものようにまた震度3くらいの地震と思っていました。ところが地震はマグニチュード9.0の大地震で、大きな津波が東北を襲っていました。私は正直被害はたいしたことないんじゃないかなと思いました。しかし、毎日のように地震や津波による被害のニュースは絶えませんでした。福岡において何の被害も無く、ただバイトに行ったり、ご飯を食べたり、家族と一緒に毎日一緒に、いつものように平凡な毎日を送っているような私のことを、現地の方達はどう思っているだろう、と考えました。何の力も無いかもしれないけど、誰か一人でもいいから、ほんの少しでもいいから、誰かの役に立ちたいと思いました。それが今回の東日本災害ボランティアに参加したきっかけでした。

ボランティア当日、私は1号車のみんなと草刈りをして、現地で出会った佐藤さんという方のお手伝いをしました。草刈りをしているところどころに本来畑であるはずの地に、写真やガラスの破片、お皿などたくさん散乱していました。ここで私は津波の被害の大きさを実感しました。道路にはまだ、たくさんの

瓦礫の山が積んであり、つぶれた車が何十台も積まれているところもありました。私達の活動を、佐藤さんはとても喜んでくれて、本当に来てよかったです。佐藤さんは私たちに、地震当日の津波の被害のことをたくさん話してくれました。10メートル以上もある杉の木が津波に浸かって酸化したことや、佐藤さん宅の一階が津波に覆われ、家の中がグシャグシャになってしまったことなどを聞いて、恐ろしさを感じました。ボランティアセンターの方が言うには、当日のことは思い出したくない方も多いそうで、佐藤さんは私達に本当にどんな被害があったのか知りたくて、広めてほしくて話してくれたと思います。

また、仮設住宅に住んでいる方達と話をしましたが、皆さん笑顔で、悲しい顔をしていませんでした。しかし私は、あの笑顔の裏にはきっととても大きな悲しみを抱えていると思います。人の役に立てる事がどんなにすばらしいことかを学ばさせてもらいました。そして、このボランティアに参加させていただいたことを、誇りに思います。たくさんのすばらしい仲間にも出会えました。これから私はどう生きていくのか、はっきりとした考えは浮かびませんが、この経験をたくさんの人々に知ってほしいです。広めていきたいです。一生この東北大地震を忘れてはいけません。絶対に忘れてはいけません。

私はボランティアの活動を終えた今でも、毎日まだ自分ができることはたくさんあるのではないかと考えています。現地の方達はまだまだ復興作業を頑張っています。一人でも多く、力を合わせれば、復興作業も早く終わると信じています。同じ日本人として、現地の方達にとって“今”自分が何をすべきか、たくさんの人達が考え、行動に移せるようになっていってほしいです。

### **森高麗菜（商学部第二部商学科）**

実際に地震と津波による被害の様子を目の当たりにして、ニュースで見ていた全てが事実なのだと実感しました。天気の影響もあってか本当にそう思えるくらいに、現地は空虚と混沌とが入り混じっており、何だか寒々しい印象を受けました。

それでも仮設住宅の辺りだけは、人がいる温かさや安心感のようなものを感じました。ただ、やはり現地の方達は笑っていながらも心の中では私達には想像もつかないくらい大きなものを抱えているようでした。

きっと復興までには長い時間が必要です。長く向き合っていくべき事柄なのだと思います。自分の人生すべてを捧げることはできないけれど、うまく付き合っていく方法を探っていきたいです。

### **内田 彩（商学部第二部商学科）**

私が福岡大学派遣隊に応募した理由は、被災地の現状を自分の目で確かめたいという気持ちからでした。そんな時、この派遣隊の存在を知り、とにかく行ってみようと決心しました。

実際に被災地を訪れるとなれば、震災から5ヶ月経った当時でも壊滅的な光景が広がっていました。しかし、そのような状況でも元気に生きる被災者の姿が印象的でした。

今回の経験を通して、一番大切なのは「忘れないこと」であると私は思います。今後はこの現状を多くの人に伝え、息の長い復興支援をしていくことが私の理想です。

最後に、福岡大学派遣隊をバックアップしてくださったすべての方々に、この場をお借りして感謝申し上げます。

### **原口拓也（工学部電子情報工学科）**

私達1号車A班は被災地で出会った佐藤さん所有地の空き地の草むしりをしました。一日目は作業に不満はなかったけれども、草むしりだけで自分達は役に立てているのかなと少し不安に駆られながら作業をしていました。しかし、活動最終日に佐藤さん本人に「若い人達が手伝ってくれてとても助かる。ありがとう」という言葉を頂いて、私達の活動は決して無駄ではなかったんだなと思いました。またどんな小さな作業でも、それもボランティアの中では大切な一つで、ボランティアでやった作業に大きい、小さいは関係なく、今やっている活動の意味を考え活動する事が大切だと思いました。ニュースや新聞などで被災地の状況や津波の映像を見て「ひどいことになっているな」「かわいそうだな」「大変そうだな」など人それぞれ思うところがあると思います。

私はこの震災が日本で起きていることだと現実味が湧かずに現地に行きました。するとテレビや写真などでは伝えきれないほどに現地の復興状況は悪く、驚きました。家や建物が崩壊していたり、潰れた車や大量のゴミがまだ残っており、とても復興とは程遠い状況でした。

最終日に広田町の仮設住宅に行き、そこで被災者の方にお話を伺いました。話によると仮設住宅の方々は衣食住、光熱費はすべて自分で貯わなくてはならないために、クーラーを使うのを控えたり、情報が入ってこなかったり、独居高齢者に目が行き届かなくなったりなど、様々な問題があることを聞きました。このように実際に現地に出向き被災者の方々の想いを直接聞いたりすることでテレビなどでは知ることができないことを理解することができました。今回の活動は決して無駄にはならないなと思いました。

私は今回のような被災地で活動ができる機会があれば是非また参加したいと思います。ボランティア活動は今回の災害ボランティアや震災復興だけでなく、身近なところから出来ることもあると思います。これで終わりでなく、これからも被災地の復興のために自分が何ができるかを考え行動していきたいです。

### **岡村治朗（工学部電子情報工学科）**

今回学んだ事はたくさんありますが、一番重要だと思ったのは「合理的判断能力」です。その能力が必要な時は幾度となくあったと思いますが、一番印象に残っているのは最終日の神社の清掃作業です。あれは完全に合理的判断を無視し感情的判断が優先してしまったと思います。感情的判断が悪いと言っているわけではありません。感情がない人は動けないから。

しかし、神社の清掃の件は突然入ってきたにも関わらず班員の体調、朝食を食べれない、短時間での作業など様々な問題がありました。短時間しかなかったら、急いで作業をしてしまい怪我をする恐れがある。体調が悪く、何も食べないと注意力が散漫になり怪我をする恐れがある。自分はそう思います。結果、大きな怪我をした人はいませんが結果論で考えるのは間違います。

自分はリーダーをさせてもらいました。大袈裟に言うと班員の命も預かっています。そこで感情的判断を優先してしまう班員や派遣隊に対してリーダーや引率の職員が合理的判断で抑制すべきだと思うし、そう発言するべきでした。リスクに対するリスクケアを考え、それが出来ないのなら止めさせるのがリーダーの仕事だと思います。自分自身もまだ、この能力が足りていないのでこれから色々な問題に直面したとき成長していきたいと思います。

### 横尾渉樹（工学部機械工学科）

私は参加したきっかけより、今伝えたいことがあります。

被災地では現地の方との交流もありました。日々におっしゃっていたことは、風化させないでほしいということです。復興がいつ終わるかわからない中、だんだん忘れられていくのは悲しいと話されていました。徐々に、ニュースや新聞で被災地の事が取り上げられなくなっていました、「被災地のいま」を知る機会が少なくなりました。私もいつの間にか自分で、震災を終息させてしまっていました。しかし、自分の目で被災地を見て全くそうではないと感じました。

この大震災を風化させてはいけません。もっと関心を持ち、被災地について知ってください。それが、まず私達にできることだと思います。

### 手塚祥恵（医学部医学科）

倒壊した家屋、すべてが流されてしまった沿岸部…被災地で目にした光景は、言葉にならず、バスのなかで何度も何度も手を合わせる自分がそこにいた。そして、5日間、被災地の現実と被災者の方々のたくましく生きる姿を目の前に、“自分は将来医師として何ができるんだろう、もし医師だったら目の前にいる被災者の方々のために最優先で行うことは何だろう、これから必要とされる支援は何だろう…”という事を何度も何度も考えていた。復興には、多くの時間が必要で、また多くの課題が残されている。道のりは決して平坦なものではないかもしれない。しかし、日本はきっと立ち上がる。復興への道を、“医学”という尊い学問を学びながら、私も一歩一歩、歩いていきたい。

### 植村陽菜（薬学部薬学科）

今回ボランティアに参加するにあたって漠然とはしているが必ず何かを学んでくるという気持ちをもって出発した。活動を終えると私達の活動は微力であり、現地が何も変わらなかったわけではないと思うが、それが福岡で募金するより役立ったかはわからない。しかし私は参加して良かった。現地の方々のやり場のない悲しみを肌に感じ、それでも生きる人間の強さや失われたものの大きさを痛感し、自分の大切なものを大事にしようと思った。それを自分に還元し、自己実現の力にしたい。社会貢献と生涯学習の面からボランティアの意味はあったと思う。しかし最も大切な復興は不十分であるので、これからも積極的にボランティア活動に参加していきたい。

### 那須野宏紀（スポーツ科学部健康運動科学科）

私がこのボランティアに参加して一番に思ったことは、自分達はこの震災のことを何一つ分かっていないかったということ。ボランティアが邪魔になっている、迷惑になっているという話を、メディアを通じて耳にした事があったが今はむしろ私達のようなボランティアが必要とされていると感じた。

私達はテレビや新聞だけでそれが全てのように受け取りがちだと思う。私もボランティアに行くまでは、被災地は落ち着き復興に向かっていると思っていた。しかし実際は違った。

いろんな理屈とか考え方とかそんなものを捨てて、行動する事が一番大事だと思う！動いてみないと何も分からぬし、何も始まらない！今動けなかったら、いつまでも動けないと思う！

## 小田宗一郎（スポーツ科学部スポーツ科学科）

私がボランティアに参加した理由は、ダサくとも、大したことが出来なくとも傍観者ではなくそれぞれがそれぞれの信条のもと「時代の当事者」になるべきだと思ったからだ。「なぜ、エネルギーの在り方やエネルギー消費について、真剣に考えてこなかったのか？」今更ながらに、それらの思いが多く人の胸を刺すのだと思う。実際現地に足を運んで思ったことは、失ったものが多い大震災だが、教訓と得難い経験は残してくれたのではないか、ということだ。今私達は、与えられた平和と繁栄ではなく、一人ひとりが自分達自身の立場で考え、行動すべきだと思う。大震災はボランティアをする私達に、生きがいや生きる意味を教えているように感じた。



## 2号車 気仙沼市・石巻市

初日、気仙沼市に位置する離島、大島にフェリーで上陸する。地盤沈下で海は常に満潮のようで、海水が今にもこぼれ出しそうである中、そばでは重機が瓦礫を撤去しているという異様な光景だった。早速、活動場所へと歩いて移動し、3班に分かれて小雨のなか活動が始まった。1班は、旅館を営んでいる方の半壊した倉庫内の瓦礫撤去および瓦礫の運搬作業、2班は改装工事を予定している民家で壁を撤去し、ごみ捨て場までの運搬をした。3班は民家の清掃作業と畑の流木撤去を行った。

2日目も大島に移動し、初日同様3班に分かれ、1班・2班は引き続き同じ作業を行った。2日目ということもあり、現地の方とのコミュニケーションもとれ、作業も初日よりはかどった。3班だけ、初日と異なり港近くに住む老夫婦宅へと移動し、老夫婦が暮らす仮の住居に隣接する基礎部分が丸出しとなった民家跡の細かい瓦礫の分別を行った。

最終日、天候は回復し夏らしい日差しの中、石巻市北上川下流付近へと向い、川沿いの田んぼの瓦礫撤去を2号車全員で行った。瓦礫の間から草が生い茂り、5ヶ月という月日を改めて感じさせる作業となつた。川沿いのためか写真や生活用品など、いろいろな瓦礫が流れ着いており、多くのことを考えさせられながらみんな精一杯、できる限りのことを行った。



菅原さん家のリフォームのため廃材を整理



軽トラックで廃材を海岸の集積場へ運搬



小山さん家の廃材を流れ作業で撤去



気仙沼大島へフェリーで向かう

## ◆学生レポート◆

### 2号車

#### 大隈路恵（人文学部英語学科）

東日本災害ボランティアを通して、私は「感謝」を忘れていたことに気付かされました。

私が最も印象に残っているのは2日目気仙沼市の民家での瓦礫撤去活動です。作業を進めていくうちに風呂や台所があったはずの場所が把握でき、その家の被災前の生活を思い浮かべては心が痛くなりました。活動を終えて、福岡での普通の生活を当たり前に感じている自分が怖くなりました。また、今の生活がどれ程恵まれているのかを実感し、この生活に感謝しようと思いました。

被災者は風化を恐れています。風化しないよう、私が現地で見てきたものを伝え続けます。そして、多くの人が何らかの形で被災地に関わってほしいです。

#### 宇梶花乃（人文学部フランス語学科）

現地に行き、活動する中で普段自分も使っているような生活用品などを目にした時、被災する直前まで人々が送っていた普通の生活が一瞬で奪われたことを実感しました。

被災してから時間が経つにつれて、遠くに住んでいる人達の中からは大きな災害の恐怖や悲しみがだんだん薄れていっているのかも知れません。しかし、そこに住む人達はこれから何年もかけて復興のため活動しつづけなければならないし、この記憶はずっと消えることはないと思います。九州に住む私も、今回の活動で終わらせることなく、これからも何らかの活動をしながら、向き合っていけたらいいなと思っています。



小山さん宅の畠で撤去作業を終えた2号車のメンバー

### 松岡あかね（人文学部教育・臨床心理学科）

私が派遣隊に参加したのは、被災地の現状を自分の目で見たい、何か少しでもいいから力になりたいと思ったからです。目の前の光景は、私にとって衝撃的でした。目の前の光景が、同じ国に、同じ列島に存在していることが信じられませんでした。今でもその光景は目に焼きついて離れません。実際に私が被災地で出来たことは被害の大きさに比べればとても小さな事ですが、私が得たものは大きいです。私は卒業してもこの経験・被災地のことを忘れずに、何があっても前向きに生きていく社会人になりたいと思います。そしてまた被災地へ行きたいと思います。皆さん、まずは一度でいいから被災地に足を運んでみてください。「百聞は一見にしかず」です。

### 田中大樹（法学部経営法学科）

「私達は戦争を知らない。しかし、今回の震災を知った以上、私達に戦争というものを伝えてくれたように、この震災を伝えなければいけない」という意味の言葉をニュースで聞き、私は福岡大学派遣隊に参加した。私が伝えたいこと。それは、この震災を風化させてはいけない、大変な時にこそ明るくしている必要があるという事だ。私達がボランティアを行ったのは、震災からすでに5ヶ月以上経過していたのだが、震災以来手付かずであろう場所もあった。正直、「本当に復興出来るのだろうか」と思った。しかし、そんな私たちの不安とは逆に、現地の方達はとても明るかった。この時私は、「絶対に復興しなければならない」と思った。

### 俣江さおり（法学部法律学科）

私が派遣隊に参加した理由は、ニュースや新聞等のメディアを通じてではなく“自分の眼”で現地の状況を知りたいと思ったからです。

事前研修や現地での活動を通じて感じたことは、ハンドブックを作ったとか資料を集めたとか何をやったかではなく、これから活動のためにどう取り組んだか、ということが大切なではないかと思いました。そして、いかに人の手が必要なのかを実感しました。

東北から遠い福岡に居ると、3.11から半年以上経過し記憶が薄れている方もいるかもしれません。そのような方々に少しでも3.11のことを、今の現地の様子を伝えることがこれからの自分自身の課題だと思います。

### 前畠明美（法学部法律学科）

被災地を直接目で見て、思っていたよりも復旧が進んでいなくて驚きました。普段の生活の中で震災が起きたことを思い出させることも減ってきましたが、あの光景を思い出して、忘れないようにしたいです。

私は石巻専修大学の学生ボランティアと交流した時に、皆さんが「ボランティアをしている時が幸せ」と言っていたことが印象に残っています。私達には余裕があるからボランティアをすることは当然だと考えていましたが、私もボランティアできることが幸せなんだ、そういう風に感じながら活動したいなと思いました。そう考えるともっと活発に、継続的に活動できる気がします。

### **亀崎大介（法学部法律学科）**

今回の活動で、私は、成長できる「伸びしろ」を作ってきたという言い方が一番近い表現だと思います。東北の方々は、私達との別れ際に、目に涙を浮かべて何度も「ありがとう」と感謝してくださいました。そこで私は、現代に生きる人々が忘れかけていた人と人との助け合いなどの大きさを改めて実感しました。また、帰福してすぐに、肌で感じてきたことを人に上手く話すことができない、言葉と伝える術を知らない自分の未熟さを痛感しました。

これから私達は、このような壁をいくつも乗り越え、成長するため、福岡大学派遣隊の名に恥じぬよう、この瞬間を全力で生き抜くことが、今からの派遣隊の任務なのかもしれません。

### **小嶋洋平（法学部法律学科）**

東北へボランティアに行く前と行った後の心境の変化として、正直、現地に行く前は、自分自身、震災のことが風化していた。しかし、自分の目で直接現地を見て、言葉にならない思いを経験し、それまで震災のことを風化していた自分の心境を本当に恥じた。また、この震災のことは絶対に風化させてはならないと心から思った。実際に、友人にも「震災のこと今どう思っている？」と尋ねると、多くの人が自分と同じように風化していると感じていた。私達は、直接現地を見た者として、今回のボランティア活動で感じたことを周りの人達に伝え、風化させないように努めていく必要があると感じた。

### **園田匠平（法学部法律学科）**

被災地に住む方々の状況はテレビなどのメディアを通して知っていたので何か力になることが出来ればと思い参加しました。現地に行って初めは被災の状況に驚きました。同じ日本でこんな悲惨な事が本当に起きている、と自分の目で見て改めてそのリアルさを実感しました。

3日間の活動を通して感じた事は、人間の底力です。現地の方々は津波によって被害を受けている身にもかかわらず、みんなで助け合って町の復興に励んでいました。私達は福岡に戻ってくれば帰る家があり、暖かい御飯があり、着る服がある。そんな当たり前のことが被災地では当たり前ではないのです。今後も長いスパンで被災地復興のために協力していくことが大事だと思います。

### **大久保綾華（法学部法律学科）**

私がボランティアに参加したのは 実際に見て、感じてみたいと思ったからです。実際に見た町は衝撃的で言葉が出ませんでした。瓦礫の撤去や草取りなどをして、被災者の方の話を聞きました。最も印象的だったのが石巻専修大学生との交流です。自分と同じ大学生から聞く話は本当に身近に感じたし自分が普通に過ごしているなかでこんな大変な思いをしていることを改めて感じました。被災者の方達がみんな強く言わされたのが、この震災のことを忘れないで欲しいということです。実際に現地に行って、たくさんのこと学びました。現地で見たことや、被災者の方の思いをこれからも周りに伝えていくことが私たちの任務だと思います。また、ボランティアを通して被災者の方はもちろん、尊敬できる先輩や仲間と出会えました。貴重な体験をする機会を与えてくださった福岡大学に感謝します。

### 田中遼平（経済学部経済学科）

私は友人の誘いでこの活動に参加しました。被災地に行く前までは自分達にすることはもうないくらい復興が進んでいるものと思っていたました。

しかし実際に被災地で見たものは、まったく復興の進んでいない、ここが以前は町で人が住んでいたというのが信じられないような光景でした。瓦礫の撤去や土壤の清掃活動をする中で、現地の人の優しさや温かさに触れました。自分達が置かれている状況は決して幸福ではないのに、私達に優しくしてくれたことに感動しました。

私達の活動はこれからもそれぞれのやり方で続していくと思います。まだ東北は震災から立ち直れていません。微力でも今後も支援を続けていきます。これではまだ終われないです。

### 木村真理子（経済学部経済学科）

私は自分の目で被災地を見てその惨状を肌で感じたかった。そして自分にできることがきっとあるはずだ、そう考えこの派遣隊への応募を決意しました。しかし実際被災地に入って活動してみると自分の微力さ、無力さを感じました。予想以上の被災状況でまだまだ復興の手の届いていないところがたくさんありました。被災者はこの震災の事を忘れないでほしいと強く言わっていました。世の中で震災のことが確実に風化している今、現地で活動した私に出来ることは一体何なのかを考えながら、これからの大學生生活、人生を送っていきたいと思います。また、機会があったら東北へ行って人々とコミュニケーションをとりながら活動を行いたいと思います。

### 福重達也（経済学部経済学科）

私の地元は遠く離れており、今までこのような災害が起きても、現地で活動を行うということはなかなかできることではありませんでした。そのことが、私が派遣隊へ応募した理由です。

今まで平凡に生活してきた私ですが、今回の活動で「人生は、いつ何があるか分からない。今の私達の生活がどれだけ恵まれているのか」ということを痛感しました。その中で私は、これから先どうすべきかを考えました。

私の友人に、「震災の話は、悲しくなるからしたくない」という人がいました。でも、それは間違いで、現地の方々は何よりも「風化しないこと」を望んでおり、私達は活動してきたことなどを伝えていくべきだと思っています。

### 清田直人（経済学部経済学科）

今回のボランティアに参加したきっかけは、現地の人に少しでも貢献したかったということ、今回の災害の凄まじさを肌で感じたいと思ったことです。

この経験で学んだことが大まかに3つあります。まず1つ目は小さいことの積み重ねが大きなものに変わっていくことです。2つ目は、いかに自分が恵まれた環境で育ってきたかがわかりました。最後は、自然災害の恐ろしさです。テレビで見ても凄まじいものでしたが、実際に現地に行ってみるとそれ以上でした。この感覚は現地に自分がいかないとわからないものだと思います。

今後は、今まで自分の周辺のことしか考えていませんでしたが、もっと世界にも目を向けて自分にできることをしていきたいと思います。

### **中村駿太（経済学部経済学科）**

信じられない…。地震発生時、容赦なく津波が町を襲い、建物や車をも簡単に飲み込む光景をテレビで見ていました。私も何か東北の力になりたい！この思いが派遣隊への参加を決意させました。

そんな私が、実際に被災地で活動し最も感じた事。それは、まだ人手が十分に足りていないという事です。例え、作業を機械に頼っていても、最後は多くの人手を要することがほとんどです。何より、震災の風化がさらに入手不足を加速させるのでは？と危惧しています。

その風化を食い止めるためにも、私は被災地の現状を様々な人に伝え、来年以降も活動を継続していくつもりです。

### **漆下由貴（経済学部産業経済学科）**

テレビや新聞では伝わらない光景を目にし、言葉を失ったことを今でも覚えています。ボランティアに行くまで東日本大震災について何も分かっていない自分がいたことにも落ち込みました。しかし落ち込んだ私を待っていたのは荒れ果てた東北の地だけではありませんでした。震災の被害を受けても強く生きている東北の方々との出会いでした。ボランティアをさせていただくだけでなく、たくさんの生きる糧を学ばせていただきました。津波に家を流されたのに笑顔でいようとしている姿には言葉にできないものを感じたとともに、自分も些細なことで掛けず、与えられた命を大切に生き抜いていかなければならぬと思いました。今回のボランティア活動は自分にとってかけがえのない経験を与えてくれました。

### **石塚幸人（経済学部産業経済学科）**

私は災害が起きてすぐにボランティアに参加したいと思っていました。しかし、なかなか行動に移せず、にいたところ大学での募集が始まったのですぐに参加することに決めました。

実際、被災地に着いた時は思っていたよりも悲惨な状況だったので驚きのあまり何も考えることが出来ませんでした。そして、活動前までは自分には何が出来るのか、不安でいっぱいでした。

いざ活動をして思ったことは悲惨な状況の中、被災者の方達はとてもたくましく生きているなと感じました。被災者の方のめになりたいと思って参加したボランティアでしたが逆に現地の人から見習うことが沢山あり勉強になりました。

### **八尋政哉（経済学部産業経済学科）**

今回の活動は学ぶものばかりであった。見て、聞いて、話して、嗅いで、触って、感じて、考えて、自分の体と心に吸収するものばかりだった。

現地の方々と話して、特に印象的だったのは、当たり前のことが大切だということ。感謝・助け合い・絆など当たり前の言葉が一番大切だと。今、福岡での当たり前の生活は当たり前ではなく、みんなで努力して獲得した生活であり、周りの人達のおかげであり、みんなのものもある。

今ある環境・仲間・生活、当たり前に見えてしまうものを大切にして、生きていこうと思う。ありがとうございました。

### 江藤 俊（商学部経営学科）

「被災地の方と共に生きていくこと」が僕らに課された命題である。東北の方は忍耐強いと注目されたが、なぜ我慢できるのか？それは世界中や国内からの支援があったからである。マスコミの報道も被災地から離れつつある今、何も僕らはそれに付き合わなくていい。目立たなくてもいい、地味でもいいから、東北を忘れないで寄り添って生きていく必要がある。九州は関東・関西に比べ節電意識も低く、興味・関心が高いとは言えない。雲仙や桜島、西方沖地震など災害も過去に例はあるがどれも今回の震災とは比べものにならない。このレベルの災害が起きてから考えていては遅い。自然の脅威から“普通”的な生活を守るためにには「防災意識の高さ」が必要だ。

### 古賀陽登美（商学部商学科）

2011.3.11。東北で起きた大震災の時私は家族と沖縄旅行中でした。事の大きさを知ったのはホテルについてテレビをつけてから。津波警報が沖縄まで出ていてそれから連日続く、テレビの報道に呆然していました。何か力になりたいと参加した今回の派遣隊。バスの中で見た、目の前に広がる光景は想像を絶するものでただ茫然としたと同時にあまりのショックで涙が出そうになりました。復興するには5~10年はかかるらしいが、また、行きたいと思いました。私が少しでも力になれるなら何度でも行きたいです。福岡にいて出来ることは限られてるかもしれないけど、今回の地震を絶対に忘れず風化させないこと。これが大事だと思いました。

### 石川健一（商学部商学科）

現地に着き、その荒涼とした姿に言葉がなかった。3月11日から5カ月経って、未だに地震の傷跡がまだまだ残るこの被災地の姿というのは、福岡からは想像もできなかった。もっと復興は進んでいるものかと勝手に思い込んでいた。瓦礫の山や焼けて焦げた漁船、倒れたコンクリートの建物。信じられない光景が広がっている。その中で僕たちは全力で活動し、被災地の方にも感謝され、達成感もあったが、被災地の広さを考えると僕達の活動はまだまだ微々たるものだったと思う。やはり継続した支援が必要である。そのためにも、被災地では多くの方がこの瞬間も復興のために尽力していることを忘れないことが大切だと思った。

### 江原早織（商学部商学科）

「百聞は一見に如かず」マス媒体を通さず自分の目に現状を収めたい、収めなければならないという思いからボランティアへの参加を決めた。自分の目に飛び込んできた風景はどれも非現実的なもので、いくら心の準備を整え被災地の情報収集を行っていたとしても、容易に受け入れられるものではなかった。五感全てから感じた生の現状に、息をのむと同時に自分の無力さを感じざるを得なかった。微量でも力になりたいと、誠心誠意をこめて活動を行った。「心の復興に見通しあつかない」現地の方の本音を耳にし、胸が締め付けられる思いがした。風化されることなく発信し続けるとともに、将来を担う私たちが考えなければならない重要な課題であると強く感じた。

### **栄楽勇紀（商学部商学科）**

東北に着くとすぐに気付いたのが、壮絶な光景でした。見渡すと、家がひっくり返っていたり、がれきの山になっているところもありました。そこで、テレビでは感じられない、すぐにでも作業を始めなければならないという思いが、私の胸に引っ掛かりました。

活動において、「つながり、助け合い」が大事だと感じました。がれき運びでは、チームワークがとれているためスムーズに作業が行えました。被災者は、ボランティアに来る私達と気軽に話してくれたり、様々な振る舞いをしてくれました。被災者にとっては、他人と繋がることが、精神面でも復興する近道であると話してくれました。

だから、今後も東北の人達の思いを無駄にしない行動をしたいです。

### **鍋山ゆり（商学部貿易学科）**

私は出発前、ほとんど復興に近づいているのではないかと思っていました。でも、現地は想像以上にすさまじい状態で、今回の地震や津波の恐ろしさをそこで初めて実感しました。また、家や町の状況もですが、被災者の方々の心もとても深い傷を負っているということを感じました。

私は、活動や話を通して、今の私の生活が当たり前ではなくて、本当に恵まれているんだということを知らされました。ボランティアに参加できる人は限られていると思うので、現地に行った私たちが福岡の人々にも伝え、他人事ではなくてずっと忘れないようにしていくことが本当に大切だと思いました。

### **三原智子（商学部貿易学科）**

3月11日TVの映像を見て、自分に何か出来ることはないかと思い、人々を助けたいという理由でボランティアを行う派遣隊への参加を決意しました。また、自分を成長させたいと思ったのもきっかけの一つです。活動は瓦礫撤去が主でしたが、その中に大事な写真や卒業証書、生活用品など、そこには間違いなく人の生活がありました。その度に胸が締め付けられました。

私が一番に感じたことは、人の強さです。家を流され家族を亡くしても、正面から震災と向き合い、明るくこれからを必死に生き抜こうとする姿を見ました。自分の甘さ反省し、今の当たり前の生活が幸せであると私は思います。これからは、自分達がきっかけとなり次の世代に伝えることが大切です。

### **岡崎衣里子（商学部第二部商学科）**

災害ボランティアに応募した理由は、ただテレビで被災地のことを見ているだけでは誰の力にもなれず、自分にも何の影響も与えないのではと思ったからです。

気仙沼市の大島にある個人宅で2日間、最大6名で活動しました。周辺のお宅は津波で流されてしまった中、家が残ったこのご家族は改装して住まわれる予定でした。ボランティアの大工さんや個人ボランティアの男性と共に、壁の撤去・搬出作業を行いました。

ご家族の方は非常に明るく、また親切にしてくださいり、想像していた被災地の姿とは違いました。「小さくても力になれることは何でもやろう！」「何事も楽しんで生きよう」と、震災のことだけに限らず考えることが出来るようになりました。

### 毛井貴彦（理学部応用数学科）

自分はかねてより何らかの形で被災地支援が出来ないかと、地元の友人を集めての募金活動などを行っておりましたが、この度福岡大学でボランティアの派遣隊を募る事を知り、迷わず応募させて頂きました。派遣された頃は震災から約5ヵ月が経過していましたが、まだ爪痕は大きく残っており、強い衝撃と悲しみを覚えたと同時に、現地の方々の「強さ」や「優しさ」に触れ、復興に向かって皆さんがそれぞれで歩まれているのだという事を強く感じました。今回は一隊員としてだけでなく学生代表を務めさせて頂く事になりました、多忙な中で苦悩や葛藤を味わい、皆さんにも多々迷惑をかけた事もありましたが、本当にかけがえのない経験をさせて頂いたと思います。

### 近藤俊輔（工学部社会デザイン工学科）

私は今回の活動で非常に多くのことを学んだ。事前研修、被災地での活動で私はグループのリーダーを務め活動を行ったが、ほとんどが初めての経験でとても不安であった。しかし、非常に意識の高いメンバーに支えられ最終日まで活動を行う事ができた。

今回の活動で学んだ事は被災地を知るということはもちろんあるが、グループのリーダーとして活動を行う上で学んだことが大きかった。私のグループのメンバーも非常に多くの事を学ぶことができたであろうが、私はそのメンバーから学んだことが一番大きかったのかもしれない。今回の経験で学んだことを将来に活かしていくことが今後の課題であり、それが「福岡大学派遣隊」の本来の目的かもしれない。

### 阿部裕樹（工学部電子情報工学科）

私が今回この活動に参加しようと思ったきっかけは、あの3・11の震災が起きた際に何か自分達にも少しでも役に立つことはないかと友達と探していたところ、今回の派遣隊の募集を知り、入ろうと決意しました。そして、数多くの研修を重ねた後、実際に現地に行って感じたことは、自分が知っている情報以上に現状が凄まじく改めて自然の怖さ、脅威を肌で感じました。また、現地の人々はとても明るく優しく接してくれて、とても復旧・復興にむけて強い志を持たれていたので、逆に自分が勇気づけられた気がします。こういう経験は決して無駄にはならないと思うので、今回の件で終わらせるのではなく、今後も形はどうあれ支援していく必要があると感じました。

### 渡邊雄希（工学部電子情報工学科）

まず、向こうに行って感じたことは、やはり現場に行くと地震、津波の恐ろしさ等、人から直接聞くことより身近に感じることができますし、私が行った家のすぐ横では車が横転していたがそのままにしてあって驚きました。被災地の方々は思っていたより、とても元気でしたが、私達の前だから、元気に振舞っていたのかもしれません。

今後、友人等にこういう活動をしたこと伝え、地震、津波の恐ろしさを知ってもらい、被災地の方々はとても親切で逆に勇気付けられることなど、見たこと、感じたことを伝えたいと思います。

### **中村彰一（工学部機械工学科）**

現地に行く前、少なからず「他人ごと」という気持ちがあった。テレビで津波が町を飲み込む様子を見て、とても大変なことが起こっているのはわかったが、遠い存在のように感じていた。福岡にいれば不自由なく生活できる、そう思えることが嫌だった。震災があって5ヵ月、夏休みになりようやく自分の目で現地を見る機会ができた。

5日間の活動は本当にいい経験になった。自分自身で津波のあとを見て、現地の人の話を聞いて東北を身近に感じることができた。同じ日本なんだという気持ちになった。東北も福岡も何も変わらないし、いつ福岡に同じような津波がきてもおかしくない。私達若者は今回の震災を自分自身で感じ、伝えなければならないと思う。

### **高岡千容（医学部医学科）**

私は、本当に被災者の方々のために何かすることはできるのだろうか、もしかしたらわざわざ遠くから来なくても、と思われるかもしれないとずっと不安だった。けれども初日や2日目に被災者の方々から「来てくれてありがとう」と言われ、ほっとした。できたことは瓦礫撤去や、草むしりと小さなことだった。それでも少しでも喜んでもらえたのなら、私達が行く意味はあったはず。人によっては、福岡からわざわざ東北に行くのは無意味という方も少なくないと思う。けれどもニュースで被災地のことが取り上げられることが少なくなってきたので、「被災地の皆さんのことを見失してはいけないよ」という無言のメッセージを届ける大切な意味があると思う。

### **和合謙介（スポーツ科学部スポーツ科学科）**

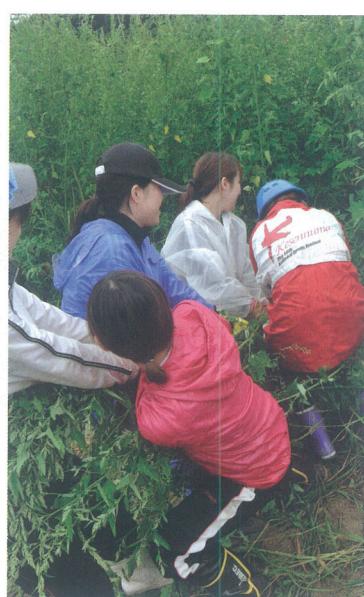
8月21日～25日の5日間、福岡大学の支援で私は東日本大震災のボランティアという普通では経験のできない貴重な体験をさせて頂きました。支援をして頂いた方々に本当に感謝しています。これは私にとって非常に内容の濃いもので色々な気持ちになりました。作業内容は主に瓦礫などの片付けでしたが、単に素早く終わらせればよいものではなく、そこには人を思いやる気持ちが大切でした。そんな中で私は人力について深く考えさせられました。自然に対し人はどうすることもできない情けなさ、最後には人力が必要であり、その力の素晴らしさを知りました。私は震災を風化させることなく人の傷みや気持ちがわかる人を増やしていくかなければいけないと思いました。

### **新開暁規（スポーツ科学部スポーツ科学科）**

私が、ボランティアに参加したきっかけは、テレビで町が流されて行くのを目の当たりにして、ただ何も出来ずにテレビに写る映像しか見れないことに対して、何かしてあげられる事はないかと両親に相談しました。すると長期休みの時に、ボランティアに行くことが、一番助かるんじゃないかと言われて、市のボランティアに参加しようと思っていた時に、福岡大学から派遣することを知り、ぜひ参加したいと思いました。

私が、今回のボランティア活動で感じたことは、まず、この震災のことは絶対に忘れてはいけない、風化させてはいけないということです。また、特に感銘を受けたことは、被災者の皆様が、心に大きなキズを持っているはずなのに、それを表に出さない強い心を持っておられたということです。そのことに私は

心を打たれたとともに、自分も同様にしっかりとした強い心を持つと感じました。ボランティアを行った私達の役目として、この震災をいろんな人に話して絶対に風化させないということが、被災された方々の願いでもあり、しっかりとやり遂げなければならないと感じました。



## 3号車 石巻市

3号車は宮城県石巻市を中心に活動を行った。

活動1日目は、石巻市湊地区で佐藤さんという方の水産加工工場の清掃を行った。活動場所が自宅と工場の2か所であったため、隊員も二手に分かれて活動した。自宅の方では佐藤さんと一緒に活動を行い、さまざまな話を聞くことができた。工場の方は、それ以外には周りの建物がなくなってしまった状態で、災害の悲惨さを、身をもって知ることができた。

活動2日目は、牡鹿半島の大原浜へ行き、地区代表の小野寺さんと共に側溝の清掃を行った。現地ではすでに他のボランティア団体が活動を開始しており、隊員はそれに加わる形で、共同で作業を行った。見渡す限りの瓦礫の山の中には、身近な生活用品が交っており、側溝には瓦礫や土砂などに、割れた食器や陶器の置物などの生活用品も入り込んでいた。それらを土嚢に詰めるたびに、現地の方々の生活がつい5カ月前までここにあったのだと、痛感させられた。

活動3日目も同じ現場で作業の続きを行い、さらに使用させていただいた公民館とトイレの清掃も行った。活動の最後には共同で活動を行ったボランティア団体の方々全員と握手をし合い、その日の活動を無事終了した。



水産加工工場の生けすを清掃した



側溝の中には、たくさんの壊れた生活用品が交じっていた



一つひとつ側溝の蓋を外しながら清掃活動を行った



コミュニケーションの大切さを痛感した

## ◆学生レポート◆

### 3号車

---

#### 田宮正基（人文学部歴史学科）

ボランティア活動は今回が初体験でした。実際自分の目で見た被災地を一言でまとめると「生き地獄」でした。5ヵ月経った段階でしたが震災直後と何一つ変わっていませんでした。瓦礫の中から時折出てきた被災者の思い出の品々に心を痛めました。その中でも人々との出会いは大きな喜びでした。前向きに生きる被災地の方々、他のボランティア団体の方々…。中には外国人の方も参加されていて、人助けの気持は国境を越えることに気付き暖かい気持ちになりました。

震災から1年近くになりましたが、まだまだ被災地の鬱いは続いています。今後も何かの形で被災地支援に関わっていきたいです。

#### 平田香純（人文学部日本語日本文学科）

私が災害ボランティアに参加しようと思ったきっかけは、テレビに映し出される被災地の様子と自身の生活とのつながりがあまりにもなさすぎて信じられなかったからだった。研修を重ね訪れた現地は、想像の遥か上をいった悲惨さだった。そんな現地で活動をして思ったのは、本当の復興とは何なのかということだ。綺麗にするには瓦礫を撤去すれば良い。しかし活動中触れるもの全てに持ち主がおり、思い出がある。現地の方々からすれば瓦礫は一つもない。活動中にその疑問への私の答えは出なかった。

私はこれからも被災地の復興へ携わろうと思う。重要なのは忘れないことと、やってみることだ。これからの活動で、今回の疑問の答えは出るのかもしれない。



炎天下のもとと共に汗を流した全員が集まり石巻市大原浜地区避難所前で小野寺さんを囲み記念撮影

### **澤山夏希（人文学部教育・臨床心理学科）**

2011年3月11日に東日本大震災が起りテレビから流れてくる映像に今まで味わったことのない動揺を覚えた。福岡大学でボランティアの募集があったので応募し説明会や研修を重ねた。出発の日が近づくと不安になり、自分はうまく活動できるのだろうか？とばかり思っていた。実際に現地に行き、現地の方々の話を聞いたり他のボランティア団体の方々と活動して思ったことは、コミュニケーションは大事だということ。この能力があれば団結力・行動力が生まれ、人を元気にすることができると強く感じた。今回のボランティア活動で自分の経験値を上げることができた。私はこの東日本大震災を風化させないよう周りに伝え、発信していきたい。

### **宮澤寛享（法学部経営法学科）**

この活動に参加したきっかけは、FU ポータルを見てこの募集を知り、テレビで毎日のように報道されていて、何かしたいと思い参加しました。活動を通して感じたことは津波の恐ろしさはもちろんのこと、それ以上にボランティア活動をすることで微力ながらも被災者のために少しでも力になれたらとの思いです。活動内容は石巻市の漁港や水産加工会社の清掃活動を行いました。

最後に皆さんに伝えたいことは、まだまだ被災地にはやることがたくさんあるということです。私達でも少なからず被災者の力になることはできます。どんな形でもよいので、支援するという気持ちを持ってほしいと思います。

### **池松龍ノ介（法学部経営法学科）**

2011年3月11日、私にとっては普段と何一つ変わらない一日。しかしその日、大震災が東日本を襲い、連日現地の目を疑うような映像がメディアに溢れました。偶然、派遣隊募集を知った私はすぐに申込みに行きました。初日に目の当たりにした現地の光景に私は息をのみました。どんなに辛かっただろう、言葉が出ませんでした。しかし、家屋が倒壊し、辺りに家財道具が散乱する中、現地の方々は笑顔で我々を迎えてくださり、復興に懸命に取り組まれていました。その姿を見て私は逆に元気をもらいました。この活動で、私達は現地に行った者としてこの震災が忘れ去られないように皆へ伝えていかなければならぬと感じました。一日でも早い復興を強く願います。

### **倉内愛子（法学部経営法学科）**

私が今回の活動に参加しようと思ったのは、テレビで見る映像では実感がわからなかったので現場を自分の目で見てみたかったからです。5日間という限られた時間の中で信頼し合えた仲間達と作業し、被災地の方々と関わり、ほんのわずかですが私達が復興の力になれたことは大きな自信につながりました。この経験を自分の言葉で伝えたくて9月21日に行われた報告会で発表もさせていただき、貴重な経験となりました。これらのことと物事に対する意欲が大きく変わり、今はこの派遣隊メンバーで立ち上げたボランティアサークルにも携わっています。今回の活動で得た仲間達と今後も切磋琢磨しあい、様々なことに挑戦していきたいです。

### **井手博美（法学部法律学科）**

私がこのボランティア活動で特に印象に残ったことは、2、3日目の側溝の掃除の際に他のボランティアグループの方々と活動を共にしたことです。海外から来た方も多く、色々な立場の方々が日本の方になりたいと手助けをしてくれていることに感動しました。九州に帰ってきて、ドイツやアイルランドに留学していた友人2人と会う機会があったのですが、どの国でも日本は愛されており、震災について心を痛めていたそうです。私は来年から社会人になり、日本の未来を背負う一員となります。このボランティア活動で得た奉仕の精神、そして日本人としての誇りをもって、今以上に海外の方々に愛される日本を築きあげていきたいと思います。

### **永野俊太郎（法学部法律学科）**

私はこのボランティアに参加するまではもの凄く消極的で過去の事をくよくよ考える人間だったが、今回の5日間の活動はそれに悩むことの間違いを知り、前向きに生きることを身体に覚えこませる大きな経験になったと思う。人は生きるのであれば前を向いて生きていくしかないのだと実感した。後ろを振り返るばかりではむなしくなるばかりだ。

多くの人々が亡くなり、多くの建物、人々のそして町の記憶も消失した。しかし、その残骸を放置するままにできないのが人間だと思う。また生きていくために瓦礫を拾い明日に希望を持たないといけないと、それが人の生き方なのかと。

### **土橋亮太（法学部法律学科）**

地震が起った次の日に、「行きたい」と親に言った事が始まりでした。行きたいというきっかけを経ずに、行こうという決心が反射的についていました。実際行ってみたら、瓦礫の山が何個もあって言葉を失いました。そんな中で3日間、石巻市で活動をし、被災地の方の土地に踏み込んで作業をすること、自分達の都合でボランティアをしてはならないという事を学びました。さらにリーダーとして全体の気配りや目配りなど、リーダーシップや人間性も大きく成長できたのではないかと思います。この経験や被災地の現状を次の世代や、行っていない方々に伝えていく事が僕たち派遣隊に課された義務だと思っています。

### **明石浩靖（法学部法律学科）**

今夏、福岡大学派遣隊の一隊員としてボランティアに行きました。その時学んだこと等を今後に少しでも役立ててもらえたと思います。参加のきっかけは、メディアを通して得る情報ではなく現地の生の情報を少しでも知りたかったこと、間接的にではなく、直接復興支援をしたいと思ったからです。

派遣隊に参加して特に学んだことは、当たり前であることが実はとても幸せであることを痛切に感じさせられたことで、次にリーダーシップ力を磨くことができたことです。今後に活かしていきたいこと、それは学んだことを伝えるとともに、今後ともボランティアが続くように、周囲の人にも呼びかけをすることです。

### **前川広恵（経済学部経済学科）**

今回、ボランティア派遣に参加しようと思ったきっかけは、実際のテレビでは分からない現地を見て、被災地の方と接する事で、色々と学ぶ事があると思ったからです。私達の班は、瓦礫や土、生活用品で埋まってしまっている側溝を清掃する手伝いをしました。実際参加してみて、一番感じたことは、現地はまだ瓦礫の山で全然人の手が足りてないという事、各国からボランティアの方が来られていた事の暖かさを感じました。海外の方とペアになって少ない単語で一緒に作業をし、最終日には一定の範囲まで作業を済ます事が出来、達成感を味わえました。機会があればまたボランティアに行きたいと思いました。

### **光安千央（経済学部経済学科）**

私が今回ボランティアに参加した理由は、もっと被災された方に寄り添う気持ちを持ちたいと思ったからです。周りの人、そして私自身も募金や支援物資を送って「支援した」と、自己満足で終わっているのではと感じていました。実際に被災地で活動して、復興までには本当に時間がかかるということを一番感じました。私達は一日も早い復興を、と思いますが、被災された方の中には一つ一つのことを受け止めながら、ゆっくりゆっくり復興へ向かいたいと思っている方もいると思います。本当に人の気持ちを理解するということは難しいことですが、少しでも理解できるよう、人に寄り添う気持ちというのを持ち続け生きていこうと思います。

### **花田真樹（経済学部経済学科）**

私は震災が起きた時、何もすることができない自分への無力感に、何か自分にできることはないかと思い、この派遣隊に参加しました。私はとにかく東北の人に何かしてあげたいと思って挑みましたが、活動していくうちに、自分から学んでいこうとしなければ、現地の人々や派遣隊のみんなともうまく活動できないなと思いました。ボランティアは人のためにという気持ちも大事だと思いますが、一番は自分で何か学ぼうといった気持ちが大切だと思います。実際現地へ行ってたくさんの事を学びました。寄付金や支援物資などもありますが、一度現地へ行ったことは貴重な経験だったと思っています。

### **原 孝寛（経済学部産業経済学科）**

現地に行くと予想していたよりも悲惨な状況だった。震災から5ヵ月以上経って現地へ向かったので、私は正直もうやることはないとと思っていた。都市部はかなり復旧されていたようだが、街から離れ海岸沿いへ近づくたびに被害の跡が大きくなっていた。

私の活動は主に瓦礫の撤去や溝掃除だったが、正味3日間ではとてもじゃないが作業を終わらせることはできなかった。現地の方に「来てくれるだけありがたいよ」と言われたことが最も心に響いたが、同時に、普段何不自由なく暮らしていることに少し引け目を感じた。

復興へ向けた課題はまだまだ残されているので、これからも役に立てる機会があれば頑張りたい。

### 中尾壮志（経済学部産業経済学科）

3月11日、初めて東日本大震災の事を知ったのはテレビでした。衝撃的で本当に日本で起こっているのかと思いました。以前から何か人の役に立つことをしなければと考えていたので震災が起こって自分も何かできないかと感じました。大学の後押しと仲間の存在は自分を前進させてくれました。実際に被災地に足を踏み入れると、復興の補助や様々な援助活動はまだまだ必要だと感じ、自分達にももっと出来ることがあるのではないかと感じました。現地での活動は終わりましたが、被災地の状況や自分達の経験を出来るだけ多くの人に伝えていかなければと感じました。

### 山下 謙（商学部経営学科）

私が、現地に行き感じたことは沢山あります。まず初めに被災地域を生で見て、自分の住んでいる同じ日本なのかと感じました。また、現地では新聞などで感じることの出来ない臭いが5ヵ月経ってもまだ漂っていました。そして、交流会を行ったのですが、石巻専修大学の学生団体の方達は、忙しいにも関わらず、自分達に沢山の思いを伝えてくれました。交流会の中で「3月11日の14時45分に戻りたい」と話をしてくれました。普通にお風呂に入れて、食事も出来て、ちゃんとした寝床で寝る。当たり前前の生活に戻りたいと。私に出来ることは、この思いや経験をもっと他の人に伝えていくということ。そして、地震、津波のことを風化させてはいけないことだと考えます。

### 田畠信弥（商学部経営学科）

被災地にはまるで、戦争のような光景が広がっていた。原形をとどめていない車、基礎だけになった家、折れ曲がった電信柱、塩害によって変色した木々…。すべてが震災、そして津波の凄まじさを物語っていた。現地では、工場清掃や、側溝の泥かきを行った。どちらの活動も復興までの道のりを考えれば、微力だったことは確かだ。しかし、私達の活動でほんの少しはあるが、復興に近づいたことも事実である。

被災地で活動した私達が、これから出来ることは、友人、家族、親戚等、自分の繋がりのある人へ、見たこと、聞いたこと、感じたことを、伝えることだ。それが被災地の明日へ、そして、未来へ繋がると、私は信じている。

### 宮口佳代子（商学部商学科）

実際現地に行って被災地を見て言葉にならなかったです。建物もない、木もない、電信柱もない、人もいない。残るものは瓦礫だけ。すべて津波に飲み込まれたのだと思うけどやっぱり私にとって非現実的すぎて、実感がわからなかったです。震災が起こって5ヵ月後に現地へ行きましたが、復興にはまだまだ時間がかかるということが実感できました。私が現地で行った活動は本当にちっぽけなものだったと思いますが、私自身の心に大きく残り、本当に行ってよかったと思います。復興にはまだまだ時間がかかります。現地に行くことは難しいですが、私ができることをしていきたいと思いました。

### **月野愛美（商学部貿易学科）**

私が参加しようと思ったきっかけは、リアルタイムの地震速報を見ていた時でした。被災地では苦しい生活を送っていて、自分はテレビの前で被災地の状況を見ていることしか出来ない事に申し訳なく思い、復興の役に立ちたいと福岡大学派遣隊に応募しました。

3日間の活動を通して、私は被災した方々のテレビでは報道されない生々しい体験談から人の優しさを感じる話などたくさん聞くことができました。自分が思っていなかったような事を聞けたのは、すごくいい経験になったと思います。

このような時代に生まれてきた私達は、今後も復興のために活動し続けなければいけないと思います。私はこれから多くの人に伝え共に活動し続けたいと思います。

### **川上理沙（商学部第二部商学科）**

私が派遣隊に参加した理由は、実際に現地に行って震災の現状を自分の目で見てみたいという想いからでした。現地に着いて見た被害状況はテレビで間接的に見るのとは異なり、津波の高さや家屋が崩れている様を身をもって体感させられ言葉が出ませんでした。自分の想像を遥かに上回る被害状況に本当に来て良かったのか？と不安にもなりましたが、派遣隊の皆と協力し合い、また現地の方と実際に交流する中で不安はなくなりこの震災を風化させないために、きちんと向き合わなくてはいけないと実感しました。

今後は自分から積極的に動き、体験してきたことや現地の様子を周囲の方々に伝えていきたいです。

### **西山明子（理学部理学研究科応用物理学専攻）**

私が今回の活動で印象に残っていることは、現地で出会ったボランティアの人達の細やかな気配りです。現地の方に無理をさせていないか、ボランティアのメンバーの体調は大丈夫か、みんなが満足できる活動ができているか、などお互いを大事にすることで全員が気持ちよく活動し、楽しいボランティア活動ができる学びました。被災地という特別な状況だったからこそ、自分の利害に関係なく人を思いやれたり、チームを大事にして自分自身も大事にされるという、貴重な経験ができました。これからボランティアで学んだことを活かし人の役に立つことをしていくために、独りよがりではなく、人とのつながりを大事にする人になりたいと思っています。

### **豊永卓矢（理学部応用数学科）**

今回のボランティアに参加したきっかけは、ニュースで地震のことを知って「これはひどいな、何かできることはないかな」と思い、偶然、福岡大学でボランティアをやるという話を聞いたのでやってみようと思ったのがきっかけです。

実際、派遣隊に参加していろいろな人達と触れあう機会があり、個人個人の考え方や、意見など知ることができ、自分の考えだけではなく人それぞれにそれなりの考えがあるのだと驚きました。私は、このボランティアに参加して、サブリーダーをしたのもあり、人前で意見を述べることができるようになったりなど、いろいろと自分なりに成長できたのではないかと思います。

### 塚崎雄介（工学部社会デザイン工学科）

まず、この派遣隊に参加したきっかけは知人により募集を知り、募集期間が間際だったのですが、すぐに応募しました。

現地で活動して学んだことは、現状の悲惨さを身を持って分かったことと仕事を円滑に進めることです。瓦礫の山や被災地の方の目に見えない苦しみを感じ、これを見過ごすことは自分のためにもならないことで、引いては自分の生活にも関わることだと確信しました。

またボランティアメンバーと関わることで一人一人の考え方などに凄いと思えることがありました。しかし世論は現地のことを忘れかけており、そのような人に考えを伝えるには何がベストであるかを考えています。そのことは私の人生の大きな糧になるであろうと感じています。

### 谷祐太朗（工学部社会デザイン工学科）

私は派遣隊に参加して、活動前と後では自分の中での価値観が変化したと感じます。何がどう変わったのかはわからないけれど、自分に自信が持てるようになりました。活動前は自分の大学生活はこのままでいいのかなど、いろいろと先のことを考えることがあるものの、何かをするということもなく過ごしていました。活動後はとりあえずやってみようという考えに変わり、考え過ぎないようになりました。私はこの経験で学んだ多くのことを、就職活動で活かしていくとともに残りの大学生活を充実していきます。

### 吉村淳史（工学部社会デザイン工学科）

僕は派遣隊に参加するまでは今回の災害に対して何かしたいという気持ちと自分に何が出来るわけでもないという気持ちの両方を持っていました。しかし、実際に現地に行ってみて良かったと確信を持てます。自分達が行ったことは、今回の被害の復旧から考えるとごくわずかなことかもしれないけど、意味はあったと思います。自分が今回一番身にしみた事は、「やらないと分からない」「動かないと変わらない」という事でした。参加の前後で自分の考えが変わりました。被災地の役に立てたうえに人として学ぶことも多くあり成長出来ました。また、被災地の衝撃を忘れられる事のないようにしたいです。この経験は僕の大事な経験となりました。

### 焼山健瑛（工学部社会デザイン工学科）

この派遣隊の募集がある当初福岡市で募集していた災害ボランティアに参加しようと思っていたが、日程などが合わないこともあり参加を断念しました。その時福岡大学で募集していることを知り、絶対参加したいとの思いで応募しました。

この活動の中でコミュニケーションの大切さ、協調することの大切さ、ON/OFFの切り替えの重要さを再認識することができ、これらのことと日常でもできるくらいには学べたと思います。

今後、この学んだことを日常生活で活かすとともに、自分が経験したことを周りの人に少しでも伝えられたらと思っています。

## 深野木渉（スポーツ科学部スポーツ科学科）

3月11日、衝撃的な日でした。あの時、東北のために私は何かできないのか？力になれないのか？何でもいいから何かしたい、そこに東日本災害ボランティア福岡大学派遣隊というお話をあり、私はすぐに応募しました。そこでは強い意志で、少しでもいいから復興に役立てればと思っていましたが、そこで見た光景は壮絶なものでした。いくら自分が頑張っても片づけても進まない環境。3日間で何が変わったのか？自分も何か貢献できたのか？と思う時もありました。しかし暗いことばかりではありません。そこでは自分と同じ考えを持つ仲間ができ、さらには強い意志を持った現地の人々の出逢い。これは私の経験の中で大きな財産です。

## 後口成就（スポーツ科学部スポーツ科学科）

私が参加した理由は震災後、直接現地に行って何かできないか、東北の復旧、復興のためにお手伝いがしたいという気持ちからでした。宮城に行く前は震災から5ヵ月、ニュースでも取り上げる機会が減っていたので復旧へ順調に向かっているという勝手な妄想を抱いていましたが、実際に現地で見た光景は想像を絶するものでした。復興どころか復旧してもいない、言葉を失いました。震災の大きさ、被害を考えると私達の活動は本当に微力でまだまだ多くの人々の支援が必要だと感じました。しかしこの小さな活動が次のボランティアの方へ、そしてまた次へとバトンを渡していくことで東北は必ず復興に向かうと思います。自分にできる支援を継続していきたいです。



## 1～3号車 南三陸町上山八幡宮

私達は、急遽予定を変更して8月25日早朝6時にホテルを出発し、まず南三陸町防災対策庁舎前に立ち寄り全員で黙祷をささげた。その後、徒歩で活動場所である上山八幡宮に隣接する宮司さんの家へ向かった。この八幡宮は比較的高台にあるにもかかわらず、津波による被害は大変大きなものであった。震災当時からほとんど手が付けられていない状況のなか、海水で腐敗したような臭いが漂っていた。家の外には家材道具が流れ出されており、割れたガラスや流されてきた鉄骨の塊などを、私たちは8つのグループに分かれて、手作業で運び出し撤去した。また、そこには違うボランティア団体の人たちもいて、ともに協力しあい作業を進めた。

さらには、近くにある保育所の除草作業を行った。この保育所は上山八幡宮よりさらに高台にあったためか、被害は少ないように感じた。わずか1時間という短い作業時間であったが、懸命に撤去作業を行った。被災地に来て今まで3日間の活動を行ってきたなかで、ここが一番被害が大きく、始めはどこから手をつけていいかも分からず、啞然とした。

活動を終えた後で、宮司さんは9月にお祭りを開催したいと話されていた。後日、9月14日のお祭りは無事に開催され、テレビのニュースでとりあげられていた。私達は少しでも力になれたことをうれしく思い、今後も上山八幡宮の復興に協力していくことを誓った。



防災対策庁舎前で全員黙祷



防災対策庁舎から上山八幡宮へ活動に向かう



足の踏み場もないような現場での活動



辺り一面に点在している瓦礫の集積場

## 2・3号車 学生交流（石巻専修大学）

私達は、石巻専修大学のボランティアサークル「ネクスト」のメンバーと質疑応答のかたちで交流会を行った。今回の震災で体験したことをユーモアも交え彼らが話してくれたことで、とても親近感を持って聞くことが出来た。

この中で特に印象に残っているのは、「今、一番望んでいることは？」という質問に、「震災前の生活、2011年3月11日午後2時45分の前までの生活に戻りたい」と答えられたことだ。この答えを聞いて、私達は一日でも早く、震災前の生活に戻れるよう、復興に向けて、これからも支援が必要であると感じた。また、ネクストのメンバーは、福岡に戻っても、今回の震災で起きたことを忘れないで欲しいということ、そして、今回ボランティア活動で出会った方々に手紙を送るなどして心の支援をして欲しいということも強く望んでいた。

今回の交流会を通して、多くの隊員が同世代の学生の声にずしりと心に響くものを感じ、各自が何かを福岡に持ち帰ってきた。これから復興のために様々な支援と、そして何より今回の震災のことを風化させないように努めていく必要があることを強く意識した交流会となった。



石巻専修大学学生ボランティアから被災状況等について説明を受けた後、質疑応答を行った

## 派遣隊が行った学内募金の活用について（報告）

事前研修と並行しながらリーダー会議が行われた。そのなかで、リーダーの一人が派遣前に学内で募金活動することを提案した。募金活動の目的等を議論し、行動に移すまでに時間を要したが、派遣隊の学生全員で5日間の活動を行った。募金はあまり集まらないのではないかという不安もあったが、120,894円の金額が集った。

当初の目的は「被災地で子供やお年寄りとコミュニケーションをとるために使う道具やお菓子」に使用するためであった。しかし、現地のボランティアセンター（以下、「VC」）などから情報を集めるなかで、ニーズがなければ被災地の方に迷惑をかけることを学んだ。そこでまずは被災地で活動しながらニーズを探すこととした。各号車ごとにVCや活動地で出会った方々にニーズを尋ねた。

活動を終え帰福後すぐにリーダー会議を開き、募金の使い道を議論した。その中で様々な案が挙げられたが、やはり今すぐには形になる物としてVCで足りない道具類を贈ることに決定した。約10万円以上の支援をするために、ただ道具を贈るのではなく、運送会社などの企業に協賛という形で協力してもらうことも検討していた。しかし、VCと情報を共有するなかで、物品等は全国の支援団体から寄せられ、被災地には必要な物品がすでに足りており、さらにはVCの事業運営も縮小傾向にあることがわかつってきた。

したがって、今後は私達派遣隊員やVCが直接コンタクトを取り続けている家族や企業のニーズに応える方策を探るか、または福岡で継続的なボランティアをしていく団体の活動資金に充てるなどの可能性を探っていきたい。派遣隊の募金活動に協力していただいた全ての学友に心からお礼を申し上げるとともに、今後ともこの募金を活用する道を探り続けていくことをここに報告する。

福岡大学派遣隊 学生代表 毛井 貴彦  
学内募金担当者 江藤 俊



## 引率者レポート

---

### 1号車

深山可奈子（福岡大学病院 看護師）

東日本へ今回赴き、自分に何ができるだろうという気持ちで現地入りした。しかし、自分が考えている以上の光景を目の当たりにし、どのように行動すればよいか分からぬといふことが正直な気持ちであった。ボランティアというと、個人個人、とらえ方が異なると思うが、自分がこれだけやったんだという成果を出したいと考える人もいた。一番は、自分が被災した側となって考えること。ボランティアはある一定の期間が終われば、帰る場所があり、何不自由のない生活が待っている。しかし、被災された方はいつ今の環境から抜け出せるのか、出口の見えない状況の中で生活を送っている。自分が成果を出す=ボランティアをやったという達成感を得ようとするのは自分のエゴであり、何もできないがわずかでも被災した方が望む手伝いができるように思うようになった。

妹尾奈津子（ヒューマンディベロップメントセンター（学生相談室））

今回、最も印象に残っているのは、現地スタッフの女性の「目の前でたくさんの方が亡くなり、多くの方が怪我をしている姿を見てきました。これ以上、誰も傷つく姿を見たくないのです。だから、装備はしっかりとしてください」という言葉でした。この言葉は心に重く響き、現地の方が深く傷ついているという現実を目の当たりにし、衝撃を受けました。装備の準備を怠らないことは、自分を守るためにだけでなく、相手の心を守るという、細やかな心配りも含まれていることに改めて気付きました。些細だと思う自分の行動でも、相手へ様々な影響を与えていると想像できること、それが相手を尊重することだと身をもって学ぶ経験になりました。

川口修一（学生部学生課）

被災地に入るとボランティアセンタースタッフの方が「目の前に散乱している瓦礫の一つひとつは、被災者が生きてきた証しであり、被災者そのものです」と話された。私はその言葉を聞いて思わずハッとした。そして、「とにかく力になりたい！」と強く思った。一日、二日、三日、四日、五日目と日を追うごとに学生の目の色が変わっていく。一人ひとりの「一歩の勇気」が波紋のように広がり、その「想い」が大きな力となって事を成していく。その中に「私も一員として居るんだ」と感謝せずにいられなかった。一旦活動は終わったが、この想いを息長くつないでいくことが、少しでも被災の方々の手助けになると信じたい。ともに、進もう！

### 2号車

本垣内くみか（福岡大学病院 看護師）

東日本災害ボランティア「福岡大学派遣隊」に参加できたことは、災害看護に強い関心を抱いていた私にとって、貴重な体験となった。宮城県気仙沼市大島地区に派遣され、被災した現状を目の当たりにした。

最も感じ取ったのは、『人間の生きようとする強さ』だ。柚子畑の小山さんは、自身の辛さを見せずに、ボランティアスタッフに深い優しさで接していた。地元の学生達は、「震災1分前に戻りたい」と語って

くれた。それでも、前を向いて復興への活動をしている。他にも数日間の中で多くの思いを感じた。少しでも多くの人が、この震災を忘れずに生活して欲しい。そして、身近な人を、大切にする。そのことを今も、これからも、私の生き方としていく。

### 野田堅三（学生部学生課）

今回、現地に行くまでは何ができるのか漠然とした気持ちでしたが、実際に現地の悲惨な状況に衝撃を受け、使命感のような想いが湧きあがってきました。また、活動を通じ、現地の方々に我々の気持ちを伝えられたことと、学生の急速な成長が何よりの収穫でした。個人的にも職員として、コミュニケーションの取り方や臨機応変な対応等について貴重な経験をすることができました。短い活動期間でしたが、福岡大学の名を十分に轟かせ、東北復興に役立つことができたと思います。今後は、この経験を学生、職員へ語り継ぐとともに、本学も継続的なボランティア活動を行い、学生はもとより、各部署の若手職員を参加させ、全体のスキルアップに繋げていければと思います。

### 3号車

#### 森田浩章（福岡市消防局 西消防署）

第1回目の事前研修会では、学生は不安と緊張により元気が無く、被災地でのボランティアに対して私自身が戸惑いましたが、研修を重ねるたびに学生同士の意見が衝突し問題が多発していくことで、良い方向に進んでいることを確信しました。ボランティアはお互いの意見から、最善の方法を探し、良い自己満足を生み出さないといけないからです。そして、被災地に入り活動で私が一番感動したのは、最終日の南三陸町での派遣隊104名による1時間の活動です。100名以上が一ヵ所で活動するのは、非常に困難なため異例な活動でしたが、全隊員は被災地での三日間の経験を結集させ、素晴らしい活動により被災者に元気と希望を与えたことです。今回の企画に参加させていただいた事に感謝すると共に、学生の益々の飛躍を期待しています。

#### 加藤和恵（福岡大学筑紫病院 看護師）

被災地で実際に現地の人から話を聞き、とても心に大きな傷を抱えながら復興に力を入れ日々頑張られている姿を見て心を打たれました。私たちが行った活動はほんの少しでしたが、援助を行う時には瓦礫に見えるその一つひとつが生活の一部であったことを忘れずに、その人の今までの町や家での生活を考え、一つひとつ丁寧に気持ちを込めて作業を行うことの大切さを学びました。また、今後の生活を支えるにはどのような援助をすべきかを考えながらかかわりを持つことの大切さを感じました。これからまだまだ復興には多くの人の協力が必要であり、このことを風化させてはいけないと思います。そのためにこの体験を少しでも多くの人に伝えていきたいと思います。

## 古川智実（学生部学生課）

今回、東日本災害ボランティア「福岡大学派遣隊」に同行させていただき、学生同様たくさんの得難い経験をさせていただきました。6回の研修を経てもなお、不安でいっぱいだった学生が、活動を終え帰福する頃には、充実感からか堂々としてきた様には、現地で活動することの意義の大きさを改めて感じました。

また、学生と一緒にボランティア活動をし、成長していく彼らに接することができたことは、人として、教育機関に携わる者として、今後の大きな糧となりました。依然、被災地には支援が必要なところが数多くあります。今後も福岡からできる自分なりの支援を続けたいと思いますし、大学としても支援活動が継続されることを願っています。

## 1～3号車

## 重富洋二（企画部広報課）

温かい生活や尊い命を一瞬にして奪い去った巨大地震と大津波。被災地でボランティアをと勇敢にも手を挙げた学生たちは、事前研修を経て現地へ。「役に立てるのだろうか」という出発時の不安は、被災者の方々の「福岡から来てくれて嬉しい」「震災を忘れないで」「未来をつくるのは貴方たち」といった言葉で次第に自信と責任感へと変わっていった。時にはぶつかり合いながらも一致団結し、ひた向きさを見てくれた学生たち。私も多くのことを学ばせてもらった。「あなたが虚しく過ごした今日という日は、昨日死んでいったものがあれほど生きたいと願ったあした」。ある小説の一文を噛み締め、一日一日を大切に学生とともに力強く生きていきたい。



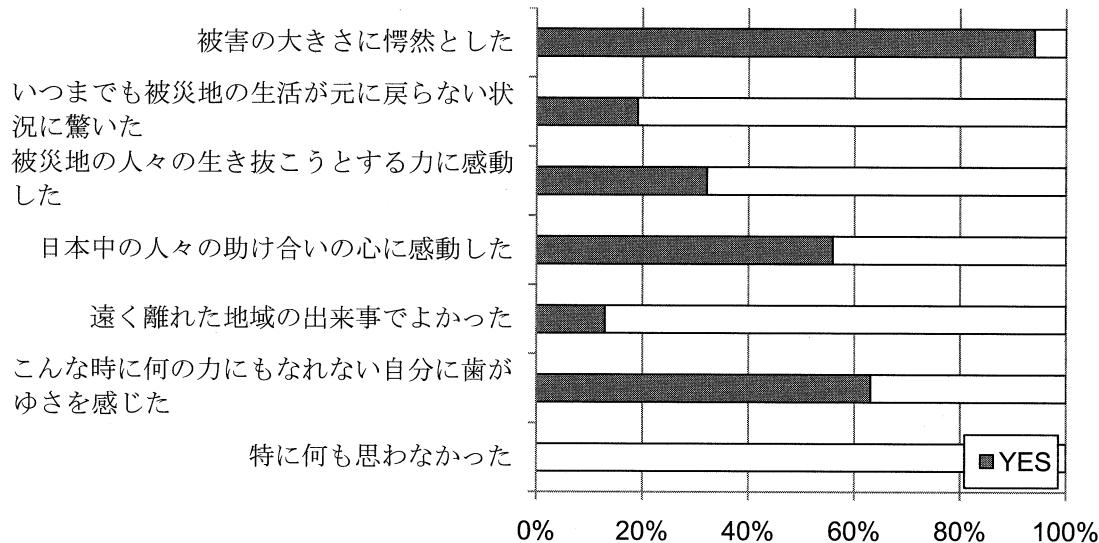
## 4

## 派遣隊の活動に関するアンケート調査

派遣隊の参加者を対象に活動を行う前と活動を終えての2回アンケート調査を行った。活動の前と後で意識の変化を調査するために行ったものである。活動前は8月19日、活動後は8月25日に実施した。

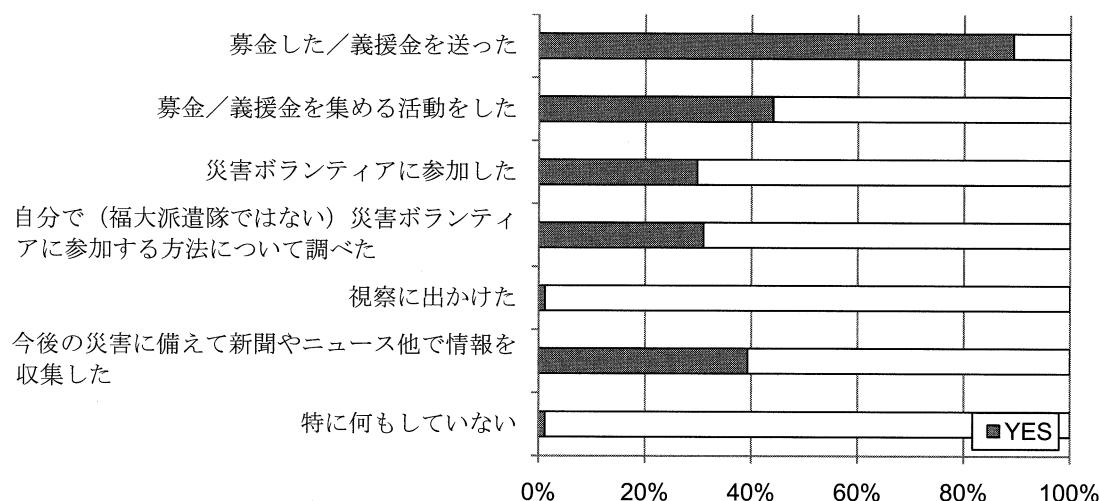
## 1. 派遣隊活動前のアンケート

Q1. 東日本大震災の報道を受けて、どう思いましたか。(複数回答可)



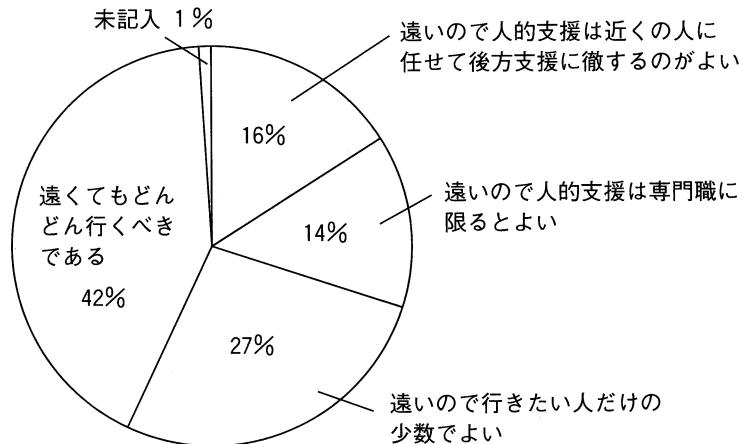
ほとんどの参加者が被害の大きさに愕然としたと回答している。また、被災地のために何の力にもなれないことに歯がゆさを感じたと回答した参加者も多く、被災地支援に対する意識が高いことがうかがえる。

Q2. 東日本大震災の報道を受けて、下記のことしましたか。(複数回答可)



多くの参加者が募金をすることやそれを集める活動を行ったことがわかり、被災地支援の意識が高いことがわかる。今後を見据えた情報収集を行った参加者も多い。

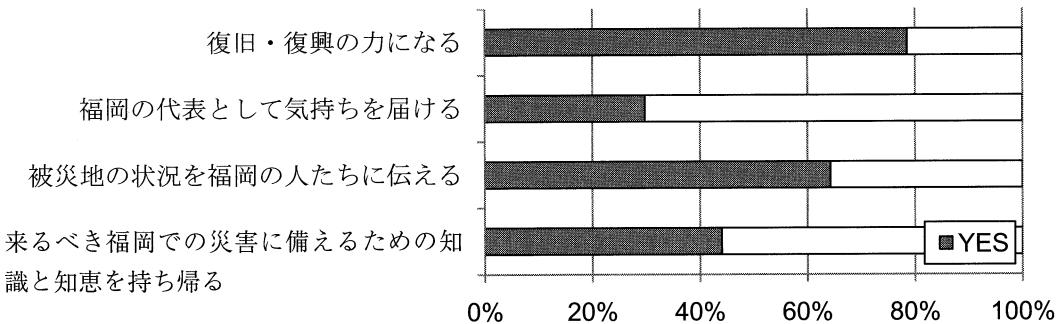
**Q3. 災害ボランティアのために福岡からも有志が被災地を訪れ活動を行っていますが、遠方で負担が大きいことがひとつのネックになっています。福岡からの人的支援はどうあるべきだと思いますか。(択一)**



福岡からの人的支援に関しては肯定的な意識を持っている参加者がほとんどである。

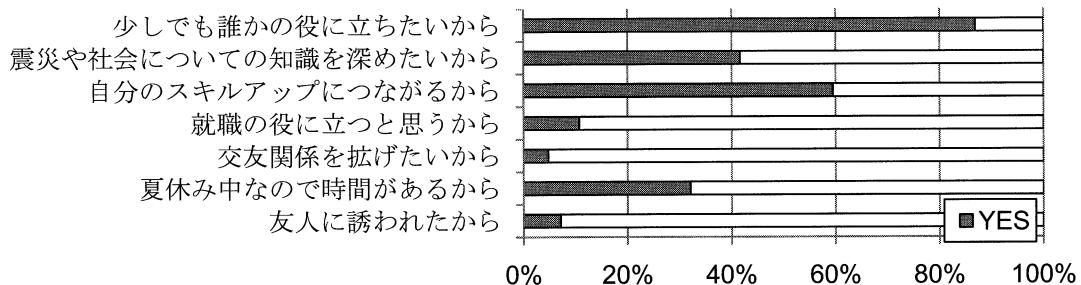
**Q4. 福岡からの災害ボランティアには何を期待しますか。また何が期待されるべきだと思いますか。**

(複数回答可)



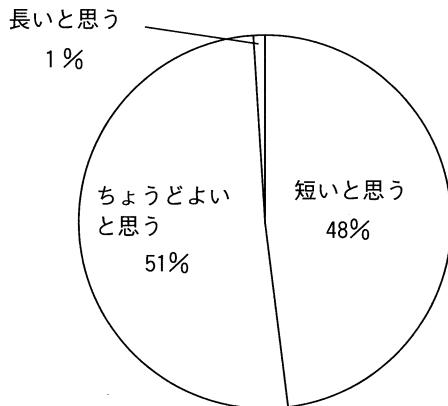
災害ボランティアの直接の目的である、復旧・復興の力になるとほとんどの参加者が回答している。また、被災地で学んだことや、来るべき災害に備えた知識と知恵を持ち帰り伝えることも大切であると考えている。

**Q5. 今回「福岡大学派遣隊」に応募した理由は何ですか。(複数回答可)**



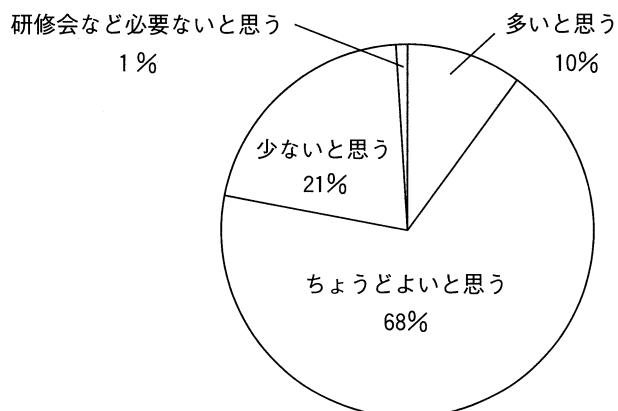
誰かの役に立ちたいというボランティアの本来の目的に加えて、自分の経験のためとする学生らしい回答も多くみられる。

Q 6. 今回の被災地での活動は 3 日間ですが、これについてどう思いますか。(択一)



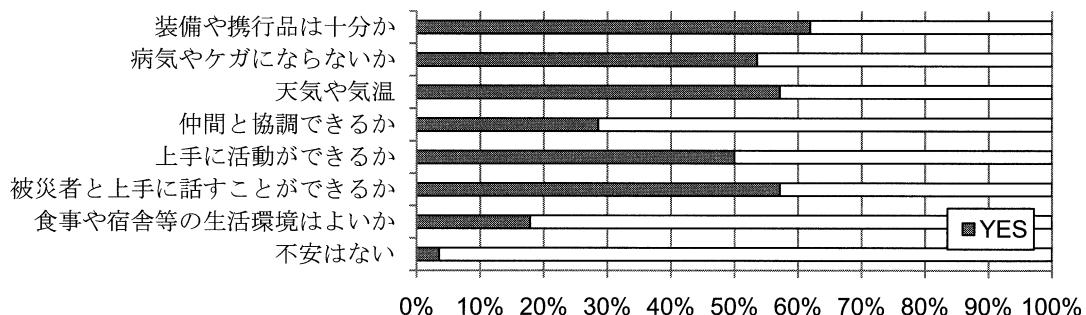
回答は 2 つの選択肢で二分される結果になっているが、それでも半数の参加者は短いと回答しており、支援に対する気持ちが表れている。

Q 7. 活動までに計 6 回の研修会がありますが、これについてどう思いますか。(択一)



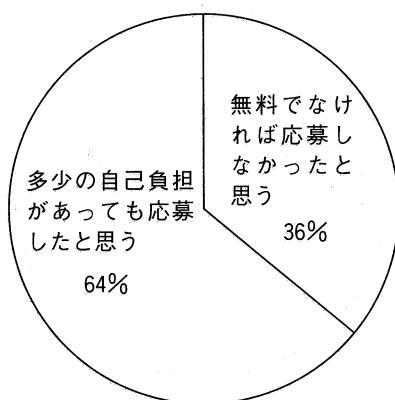
多くの参加者がちょうどよいと回答しており、回数の設定としては参加者も満足に感じていることがわかる。

Q 8. 参加するにあたってのどのような不安がありますか。(複数回答可)



ほとんどの項目に対して半数近くの回答を得ている。初めて活動を行う参加者が多いことを考えれば当然であるが、中には少ない回答者数の項目もあり、研修会の成果が表れているのではないか。

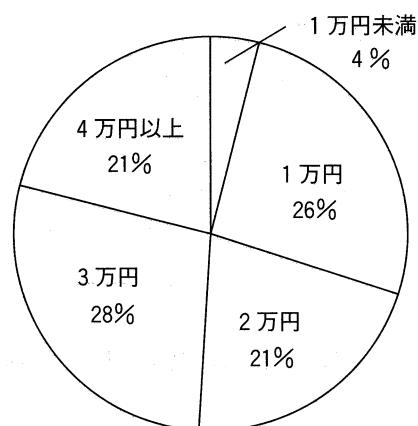
Q9. 今回の派遣隊の活動費は大学が負担するため、参加費は無料です。これについてどう思いますか。(択一)



遠隔地からの派遣は様々な負担が大きいが、それでも多少の自己負担があっても応募したという回答が一番多く、被災地支援の意識が高いことがわかる。

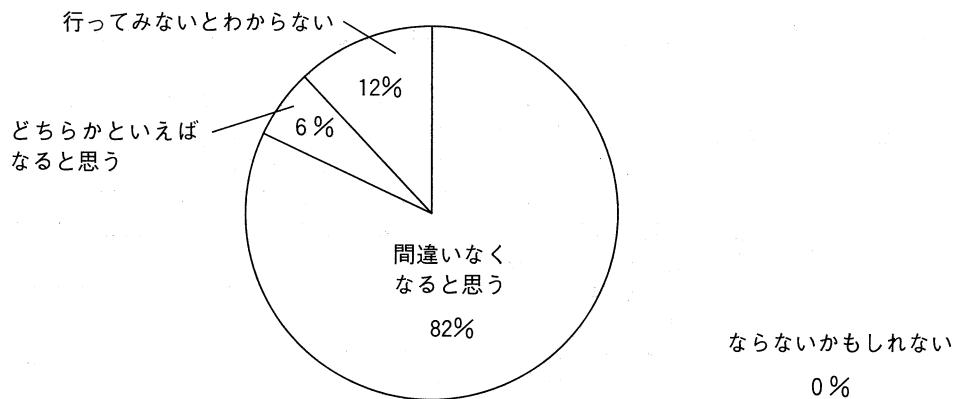
Q10. (Q18で自己負担があっても応募したと解答された方へ) いくらまでなら自己負担すると思いますか。

(幅を持たせず、具体的な金額を記入してください。)



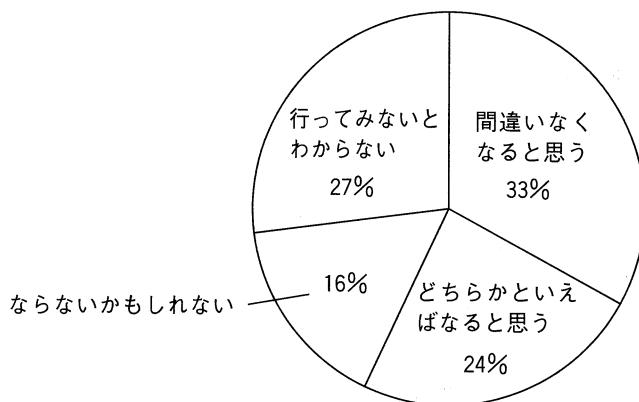
1万円から3万円の間で回答をした人がほとんどだ。経済的な面では学生らしい傾向がうかがえる。

## Q11. 今回の活動は自分にとって有意義なものになると思いますか。(択一)



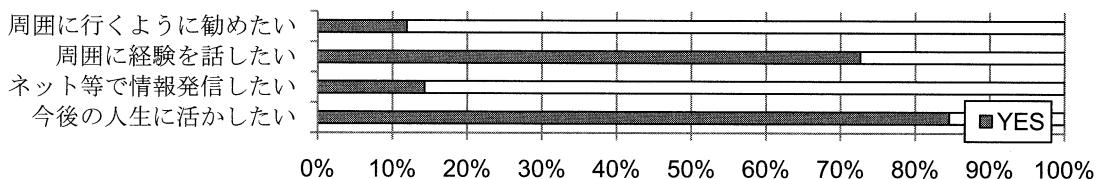
ほとんどの参加者が間違いなく有意義になると回答している。活動や被災地の環境に関して様々な不安があるだろうが、それでも行く事に大きな価値があると考えていることがわかる。

## Q12. 今回の活動は被災地の復旧・復興の役に立つと思いますか。(択一)



間違いなく役に立つという回答が一番多いが、他の回答も少ないとはいえない。その傾向からは自信のなさがうかがえるが、震災の規模を考えればそのように感じることは当然だ。

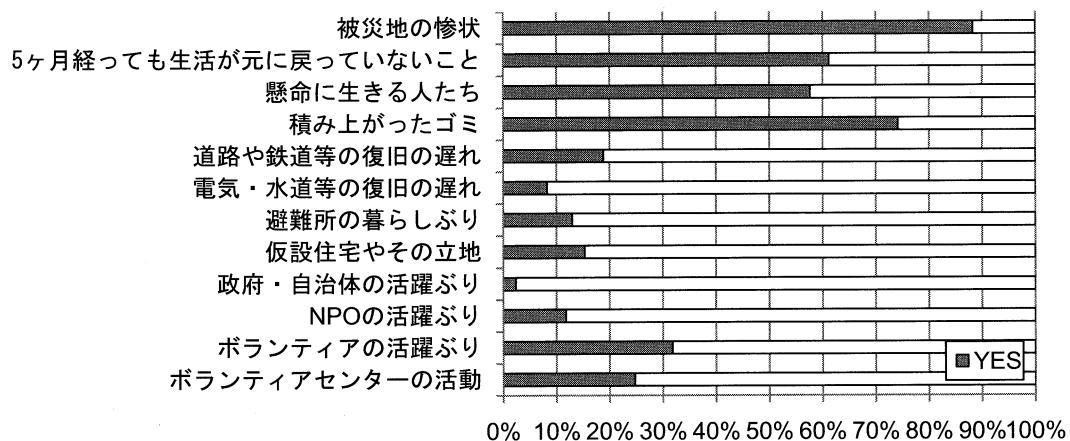
## Q13. 活動から帰ってきたら、その経験をどう生かしたいと思いますか。(複数回答可)



多くの参加者が今後の人生の役に立てたい、またそこで学んだことを伝えていきたいと考えており、活動を行うだけに終わらせないという気持ちが伝わってくる。

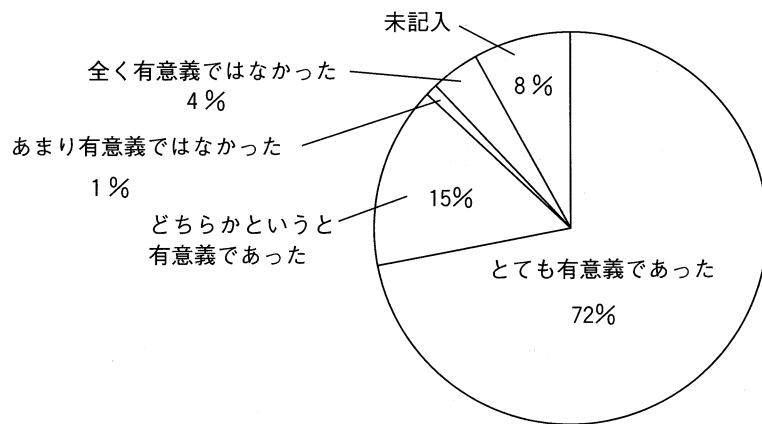
## 2. 派遣隊活動後のアンケート

Q1. 被災地や災害ボランティア活動において印象に残ったものを3つ選んでください。



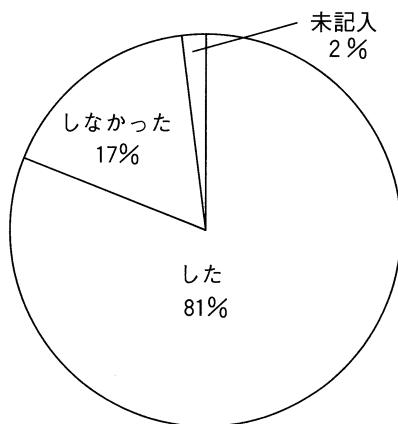
被災地の惨状等、多くの参加者が目の当たりにできる機会があったものに対して回答率が高くなっている。これらは福岡でもメディアを通して得られる情報であるが、それでも回答率が高いということはそれだけでも足を運ぶ価値があったといえる。

Q2. 学生との交流はどうでしたか。(択一)



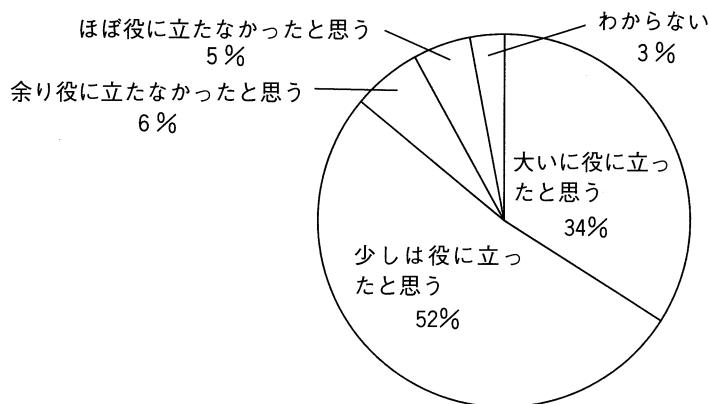
ほとんどの参加者が有意義であったと回答しており、被災者の生の声に大きな影響を受けたようだ。それが同じ大学生であったこともより印象づけた要因であるだろう。

## Q3. 学生交流以外で、他のボランティアの方と話し、情報交換をしましたか。(択一)



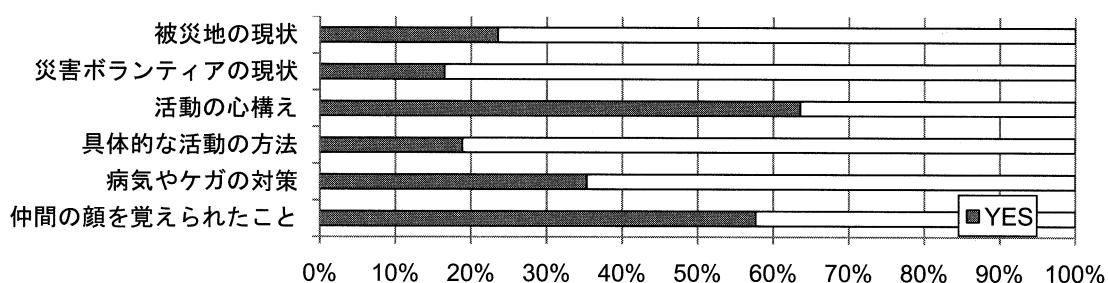
大きな団体に属せばその機会は少なくなると懸念されていたが、ほとんどの参加者が他のボランティアと交流ができたようだ。

## Q4. 今回の活動に6回の研修会は役に立ったと思いますか。(択一)



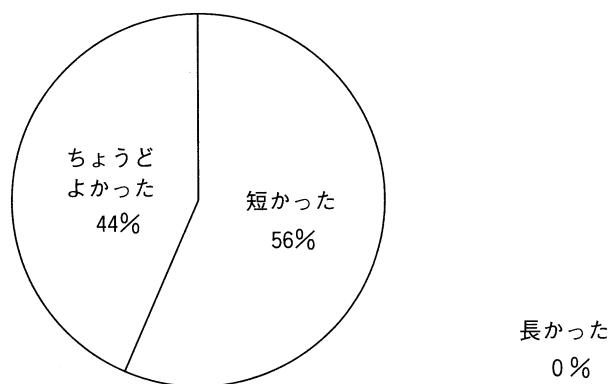
ほとんどの参加者が役に立ったと回答しているが、内容に物足りなさを感じたともいえる回答が多い。実際に活動を行ってみてその点に関して気付くことができ、今後行われる支援活動のためにも非常に重要なことを学ぶことができたようだ。

## Q5. (Q4で役に立ったと回答された方へ)どのような事が役に立ちましたか。



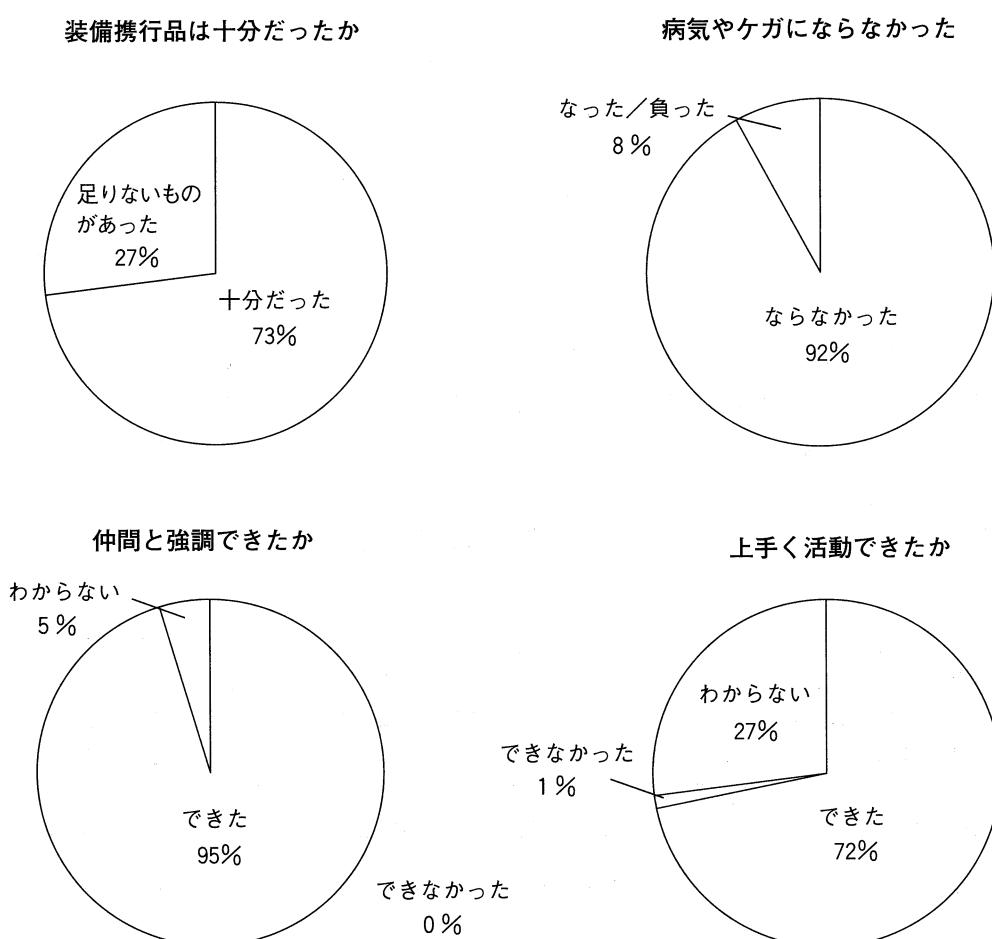
活動の心構えや仲間の顔を覚えられたと回答した参加者が多く、アドバイザーで参加していただいた森田氏の影響や、グループワークの成果が表れているのではないか。

Q 6. 今回の被災地での活動は3日間でしたが、これについてどう思いますか。(択一)

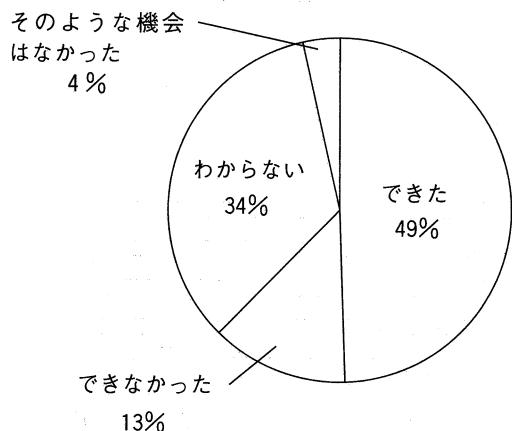


短いと回答した参加者がほとんどであった。長い移動時間、必ずしも楽ではない活動を行ってもなお短いと感じており、そのような遠隔地からのボランティアや災害ボランティア特有の障害以上に被災地支援に対する意識が高い。

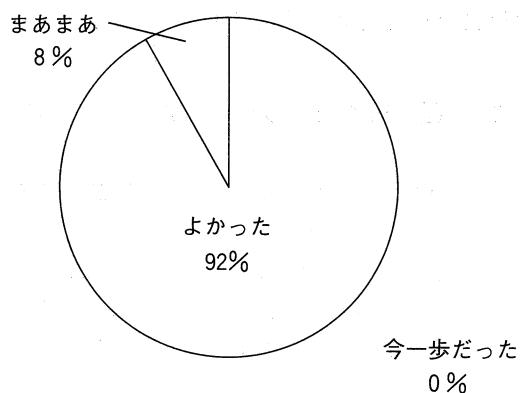
Q 7. 事前の不安に関して、実際はどうでしたか。



## 被災者と上手に話すことができたか

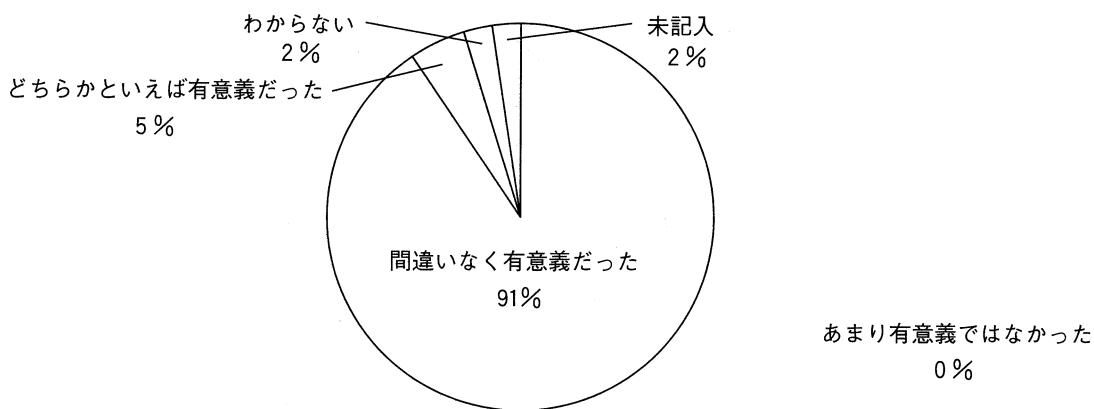


## 食事や宿舎等の生活環境はよかつた



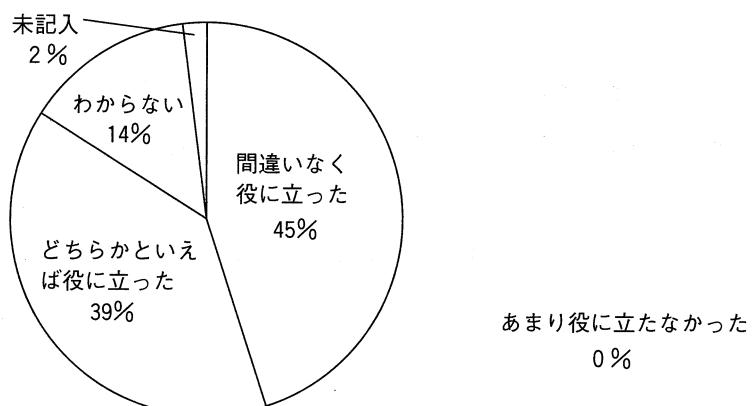
上手に活動ができたか、また被災者と上手に話すことができたかという点でわからないと回答した参加者がいるが、上手にできたかを判断することは難しく当然の回答である。その他に関しては多くの参加者が満足のいく回答をしている。

## Q8. 今回の活動は自分にとって有意義なものだったと思いますか。(択一)



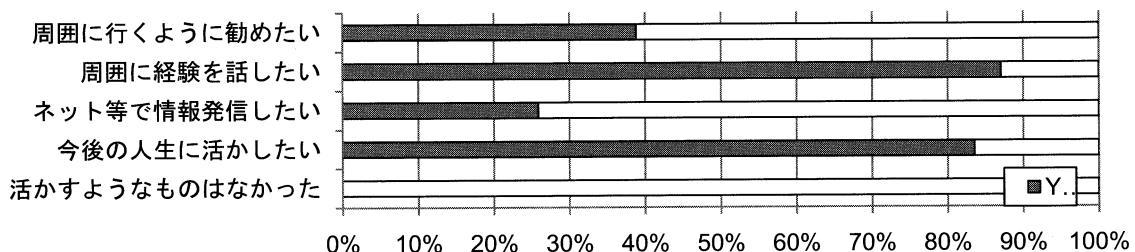
ほとんどの参加者が間違いなく有意義だったと回答しており、今回の活動の成果を表しているといえる。

## Q9. 今回の活動は被災地の復旧・復興の役に立ったと思いますか。(択一)



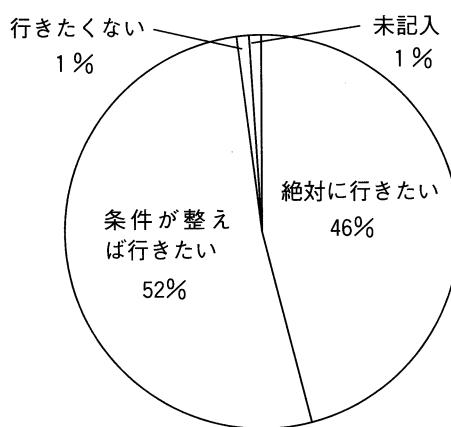
役に立ったとほとんどの参加者が回答しているが、その中には自信のなさが表れている回答もある。しかし、震災の規模を考えればこのような回答になるのは当然である。小さなことでも被災地の復旧・復興の役に立つことができたと感じている。

**Q10. 今回の経験をどう活かしたいと思いますか。(複数回答可)**



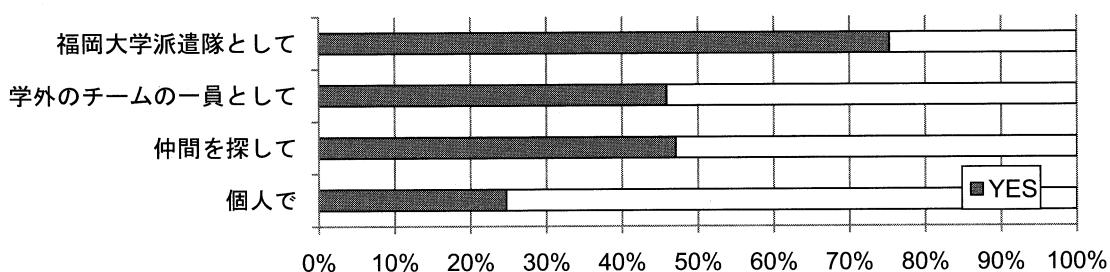
参加者のほとんどが今回の経験を今後の人生に活かしたい、またその経験を伝えていきたいと感じていることがわかる。周囲に行くように勧めたいとも4割が回答しており、今回の活動で得られたことの大きさがわかる。

**Q11. もう一度災害ボランティアに行きたいですか。(択一)**



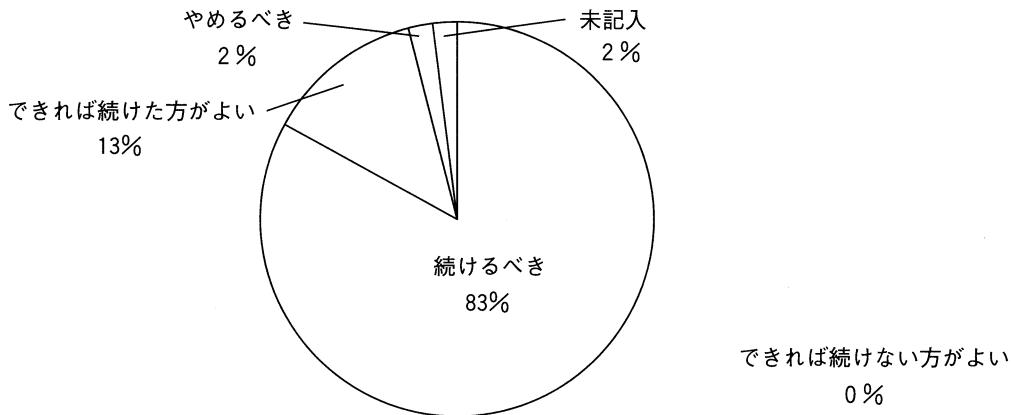
参加者のほとんどが行きたいと回答している。条件付きの回答が半数以上であるが、遠隔地であることを考えれば当然の回答であり、それでもまた行きたいという気持ちが伝わってくる。

**Q12. (Q11.で行きたいと解答された方へ) どのような形で行きたいですか。(複数回答可)**



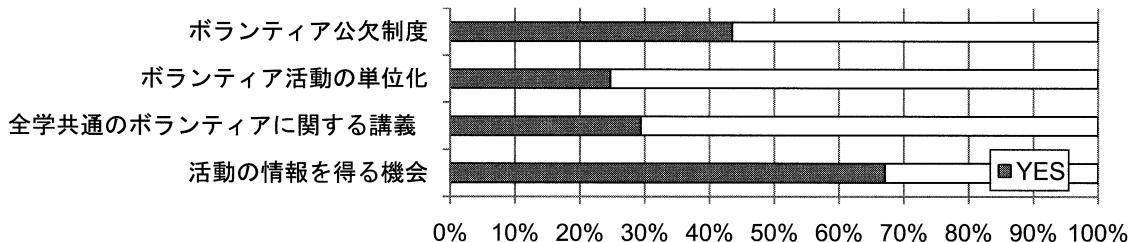
多くの参加者が福岡大学派遣隊としての派遣を望んでいる。しかし、学外のチームの一員として、あるいは仲間を探してという回答も多く、これを機にさらに積極的に関わろうとしていることがわかる。また、個人で行くことを望んでいる参加者もあり、より積極的な形で関わりたいと考えている参加者もいる。

**Q13. 福岡大学はこのような、学生による支援活動を続けるべきだと思いますか。(択一)**



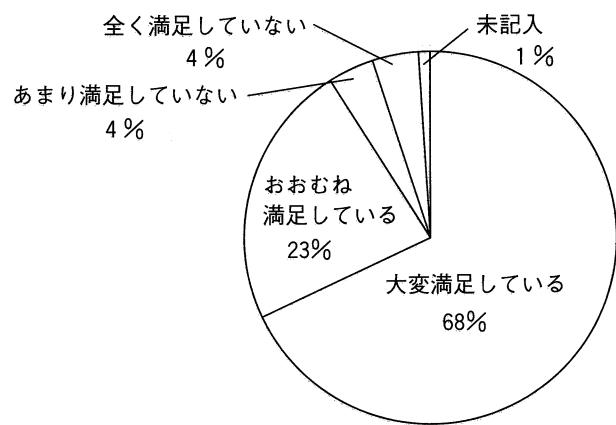
ほとんどの参加者が大学による支援活動を続けるべきと回答しており、今回の活動が学生に与えた効果を参加者自身が感じている。また、被災地支援に対しても継続した支援が必要であると考えている。

**Q14. 福岡大学が学生による支援活動を続けるとして、学生としては何が必要だと思いますか。(複数回答可)**



ボランティア活動の単位化が必要であると回答したのは 25% と必ずしも多くは無く、自身が活動を行うことにそれは必要ではないと考えていることがわかる。また、活動の情報を得る機会やボランティアに関する講義が必要と回答した参加者もあり、より多くの機会または情報を望んでいる。公欠制度が必要と回答した学生も多く、長期休暇以外での活動も視野に入れていることがわかる。

Q15. この派遣隊に応募した頃を思い出しながら、今回の活動に満足していますか。（択一）



ほとんどの参加者が満足していると回答しており、今回の活動の成果が表れている。

### 3.まとめ

活動前の参加者達は活動に対する不安も多く抱えていたが、実際の活動ではほとんどの参加者が有意義な活動を行うことができたと答えており、短期間の派遣であったにも関わらず大きな成長があった。今回の活動で終わらせるのではなく、さらなる支援活動を行うべく今後の活動を模索している。以上のことから活動が参加者に与えた効果は非常に大きく、少なからず今後の彼らの人生に影響を与える機会となったであろう。

## 5

## 活動で出会った方々からのメッセージ

(順不同)

## 小山由紀子（宮城県気仙沼市大島）

福岡大学の教職員御一同様、全学生の皆様、こんにちは！

派遣隊の皆様方には、遠方よりお手伝いいただき有難うございました。大学を挙げてのご支援に深く感謝致します。この度は、「深」という福岡大学学園通信誌に、小さな島に住むこんな私を載せて下さり皆様方の御心の暖かさを感じ取りました。夏とはいえ小雨の中での作業、いろいろに火を焚き皆で共有させていただいた「時」が昨日の様です。御蔭様で島全体が大部きれいになりました。この震災で次男が東松島で仕事中波に襲われ「どんな場面でも生きろ、奇跡の人になれ」と私が言い聞かせていた言葉を思い出し九死に一生を得ました。何事が起きても常に心の平安を保ち「生」を意識し共に生きましょう。

〈阪神大震災の時の作〉

『わが元より被災地に届け春の陽よ すべ無き人等みな救うべく』

〈全世界の子供達へメッセージ〉

『必要とされてこの世に在るのだ若者よ 勇気を持ちて歩めその道』

本当に有難うございました。

## 中島みづえ（第一薬科大学付属高等学校）

What Can I do for someone?

「誰かのために、わたしは何ができるでしょうか。」

この言葉を今回の震災で、多くの人々が思ったことでしょう。また、各人ができる支援をしたことでしょう。今回、大学生の若者が被災地に足を踏み入れ、自主的に支援活動をし、復興の担い手になってくれたことは、被災者にも生きるエネルギーと活力を与え、明日につながるステップの架け橋となってくれたことでしょう。そこから人間的なつながりが深まり、互いの助け合う気持ちの中から生まれる真の笑顔も見ることができたでしょう。

今回の活動で学びとった貴重な経験を活かし、これからも「支援の心」が多くの人々にも広がっていくことを期待します。

## 齋藤嘉徳（宮城県気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンター）

今回の東日本大震災では、各地で甚大な被害を受けました。なかでも、岩手、宮城、福島の3県は、想像を絶する2次災害によって、多くの家族、財産、想い出など生活のすべてが奪われました。

そうした状況のなか、世界中から多くのボランティアの皆さんのが、被災地へ駆けつけてくれました。特に、瓦礫撤去や泥出しなどの災害ボランティア活動では、とにかくマンパワーが必要なときでもありました。また、直接、被災者と向き合いコミュニケーションをとることも、大切にしたい活動でした。

皆さんには、被災地の方々も勇気づけられ、あるいは胸の内を吐き出すことによって、復興に対して前向きな気持ちになりましたし、少しづつではありますが、着実に復興の道を歩みはじめています。

この体験を忘れることなく、社会へ羽ばたいていくことをご祈念いたします。また、被災地のこととも忘

れないでいただければと思います。

ありがとうございました。

### 庄司二千夫・恵子（宮城県仙台市）

福岡大学の災害ボランティア活動に参加された皆さん、南三陸町での再会はとてもうれしく思いました。汗と泥まみれになり、疲れ切った顔でバスから降りて来ましたね。Tシャツが破れボロボロになるまで一生懸命がんばって来たのがわかりました。その姿が誇らしげでもありました。

現地でも優しい笑顔で寄り添い、思いやりの気持ちが現地のみんなの心を開かせ、楽しい会話が弾んだ事でしょうね。学生の皆さんを感じ、経験した事は、皆さん目の目に見えない大きな財産になったと思います。それを活かして下さい。私達も皆さんにお会い出来た事大切な宝ものになりました。

若い学生の皆さんこれから活躍を期待しております。現地はまだまだこれからです。若い力と知恵が必要です。これからも東北の事忘れないで下さいね。

ありがとうございました。

### 岡嶽伸晃（石巻専修大学 ボランティアサークル「ネクスト」代表）

東日本大震災から8ヶ月の月日が流れた石巻市は、着々と復興が進んでいる様に思われる方が多いと思いますが、過ぎゆく日々と共に、様々な問題が浮き彫りになってきているのが現状です。それと並行して、次第に風化していくのを薄々感じられている被災者の方々も少なくはないと思います。そんな中、福岡大学の皆様が今なお活動を持続されているという事をお聞きし、確実に被災地からの思いを感じとて頂けたのだと確信させてもらい、喜ばしい限りでございます。今回の福岡大学の活動は今後、個々の人生観、そして復旧復興に大きな影響を与えていくに違いありません。これからも互いに、経験した事を「忘れず」に後につなげていける事を望み、遠く離れた地での皆様のますますのご活躍を、心からお祈りいたします。

### 今野政明（宮城県石巻市北上総合支所 災害廃棄物対策室室長）

8月24日猛暑のさなか福岡大学派遣隊の皆様には水田のガレキ撤去の作業をお願いいたしました。この場所は行方不明者の捜査は終わったもののガレキの撤去はまだ手付かずの状態の場所でした。これまでの生活の中にあるものすべてがガレキとして散乱している現実を体感し、この地にしかない匂い、色、何かを肌で感じ取っていただけたことだと思います。田んぼの中の作業と限られた時間の中で被災者と直接向き合うことができなかったことが残念です。泥にまみれて汗だくになり一生懸命ガレキ撤去をしていただき本当に有難うございました。今回の経験が今後の人生の財産となることと確信しております。

### 林 幹男（福岡大学人文学部教育・臨床心理学科 教授）

私はこの度の派遣隊の事前研修に関与した一人ですが、派遣に104名もの本学学生等がボランティアとして参加したということに驚きと感動を覚えました。そこには災害の規模やセンセーショナルな応援報道に動かされたというより、たとえ遠くとも、同じ社会を生きる学生（隣人）として、「放っておけない」というヒューマニスティックな動機を強く感じたからです。実際、現地での活動や出会った人々との関わりを通じて、学生はあらためて社会との繋がりにおける自身の存在性を実感できたのではないでしょうか。

情報・ネット社会とはいって、現実を生きるためにやはり直接に関わり合う場と身体感覚が不可欠であることを104名は私たちに伝えてくれているように思います。お疲れ様でした。

### 工藤祐允（宮城県本吉郡南三陸町 上山八幡宮 宮司）

8月21日、避難所から社務所に帰った夜、ボランティア活動のため社務所に泊まることになった北九州市のF・K・Arms リーダー佐多俊孝（三助）さんにお会いしました。南三陸町に福岡大学の派遣隊が来ている。境内のがれき撤去をお願いするので、大学の先生に会って欲しいということでした。その結果8月25日朝6時、約100人の学生さんが神社に参拝して、1時間半がれき撤去の作業をして下さいました。

その詳細は「福岡大学学園通信 F. D No.35 October 2011」の19ページの福岡市消防局西消防署消防司令補 森田浩幸さんの『福岡大学派遣隊』とともに被災地へ』の記事に書いていただきました。

ご支援誠にありがとうございました。

福岡の大学生が朝に来てがれき撤去前神社に詣づる

黙々とがれき撤去する学生の姿ありがたし

夏の境内作業終えし学生たちにこの町を襲ひし津波の様を語れり

### 菅原正示（宮城県気仙沼市大島）

福岡大学の皆さんには本当に感謝しております。

大変な作業であったのに、笑顔で嫌な顔ひとつせず、明るく手伝って下さいました。それが、どれ程嬉しかった事でしょうか。

津波で自宅に住む事のできない生活になりましたが、失った物以上に人の優しさを沢山感じる事ができました。頑張りますね。ありがとうございました。

### 佐藤榮藏（岩手県陸前高田市 前広田湾漁協監事）

前略、すばらしい「Fine Dream（福岡大学学園通信）」を見て私の写真も載せていただき誠にありがとうございます。まずもって全国のボランティアの方々に感謝の意を表すと共に、日一日毎に少しづつ当たり前の生活に向かって進んでいるなあと実感しています。福岡大学生の皆さんには暑い中水だけで一生懸命瓦礫の片付けをして戴きありがとうございますを100回も言いたいです。それと大きな地震がきたらやっぱりサバイバル精神を持ち正しい判断をするという事が大事だと思います。運良く私の場合は時間的、精神的に余裕もなくただ残された家族を助けたい一心で車を我が家迄走らせ、なりふりかまわずの逃げでした。家が2棟流失、車2台の外、農業用トラクター1台、海では船一隻（船外付き）も流失。誰に当たる事もできず、ただ茫然とする毎日でした。海の男として約50年海の恩恵も受けたのに一瞬にして裏切られたようです。今は何も知らなかったような海、平穏な海、岸壁のかさ上げが決まった様ですが、第三次補正予算を期待している被災地の皆様も少しづつ動いている様な今日です。私はあの場所で家を復旧し、あの場所以外に高台はありません。ですからこの場所へ再度住み余生を送ろうと思っています。

福岡大学生の皆さんとのエンジの昇り旗が今も印象的です。100回もありますを言いたい一漁師よりの伝えとしたいです。どうか岩手の広田に来たらぜひ立ち寄って下さい。お待ちしています。

## 友田宮子（福岡県警察本部総務課）

命あることに感謝を

皆さんが派遣隊の活動を終えて福岡に戻ったとき、街や家族・友人が、これまでと変わらず暖かく迎えてくれたことだと思います。「当たり前」の有難みを感じると同時に、被災した方々の厳しい生活に思いを巡らせた人、東北の人々の生きる強さと気高さに触れ心打たれた人、数日で被災地を離れ福岡で「当たり前」の生活を送る自分を責めた人、と様々な思いがあったでしょう。

実はこれらの全ては、皆さんより少し前に警察官として被災者支援活動に従事した私が感じたことなのです。

被災地に立ち、絶対的な自然の猛威の爪跡と、その背景に美しい空や山々を見たことと思います。自然是恵をもたらしますが、非情でもあります。容赦なく突然奪われた多くの命。その無念さ、はかなさを思わずにはいられません。

隊長以下、一緒に活動した派遣隊の仲間、そして被災者の方々と過ごしたこの夏を折に触れ思い出してください。そして人の役に立てる喜びと、それを実現するための命を与えられたことに感謝する気持ちをずっと持ち続けて欲しいと思っています。

## 佐藤央子（有限会社ヤマユ佐勇水産）

福岡大学派遣隊の皆様のお陰で、10月水産加工業を再開することが出来ました。創業65年の切身屋を継ぐ（つなぐ）ことができました。遠い所から来て猛暑中ヘドロの悪臭に耐えながら、てきぱきと作業する姿は、私達家族の希望の光となりました。

地震の後、湊中学校の4Fに避難した私達は、津波が人、車、自宅、会社、地域、大切な物すべてを飲み込んで行く姿を見ました。三日後寒さと食糧不足に耐えかね、湊中のグランドから自衛隊ヘリコプターに乗り込みました。飛び立つ時のあの失望感、絶望感。まさか数ヵ月後皆様との出会いが待っているとは思えませんでした。

7月末まで避難所生活、その後仮設住宅に入居出来ましたが、その頃から中3の娘が不登校になりました。「心が壊れた子どもと大人、傷なんかではない」そう気付かせてくれたのが、皆さんの活動でした（娘は今は元気になりました）。娘は振り返ると、心のかけらを一つひとつ拾ってもらったと言っています。そして派遣隊の皆様の個々の思いやり、優しさが、当たり前にあった心のぬくもりを一つひとつ思い出させてくれました。全壊した地域のガレキの中、ヘドロの中、佐勇水産のたすきを探し出して頂いたように感じております。歴史まで流されたと思いましたが、新しい歴史の始まりとなりました。石巻の復興の土台になったと確信しております。そして家族の心の土台となりました。ありがとうございました。おいしい切身を作り続けます。

## 佐藤ゆりか（石巻市立湊中学3年）

生きる

私達は生きている。

命をいっぱい輝やかせ

つらいことや悲しいこと

自分のいやなことはたくさんある

でも、その壁をのりこえると  
 たくさんの人の笑顔がある  
 そのために日々がんばっている人達がいる  
 私達もその人達にまけないようにがんばろう。  
 本当の生きる意味が分かるだろう。

## 人

- 一、人と言う ぬくもりを  
 体いっぱい 感じ取り  
 次の世代に つなげよう  
 人は心を温めると
- 二、いつも心にぬくもりを  
 自分より人を優先し  
 次の世代につなげよう  
 日本はみんな一つだと
- 三、心をみんなにさらけ出し  
 みんなの心を一つにし  
 次の世代につなげよう  
 地球はみんな一つだと

## 安田留美（岩手県陸前高田市災害ボランティアセンター）

「つないで陸高なじょにがすっぺ」をスローガンに、私たち陸前高田市社会福祉協議会では、災害ボランティアセンターを立ち上げ、現在も被災地の復旧・復興活動を続けています。あの東日本大震災で私たちはたくさんのものを失いました。瓦礫の山でふさがれた道路、何もかもなくなってしまった市街地を見て、何の希望ももてなかつた私たちに寄り添い続け、そしてボランティア活動を続けてくれた、日本全国、世界中のみなさんに感謝してもしつくせません。ボランティア活動を通じて福岡大学の皆さんとできた「つながり」をこれからも大事にし、5年後も10年後も「新しい陸前高田市を創る仲間」であり続けてほしいと思います。

## 山内博史（有限会社九州ヘルメット工業所）

今回の福岡大学派遣隊の活動は大変すばらしい事です。学生達は被災地に行かなければわからない事等を感じ、いい経験をしたと思います。

しかし、ボランティアに行って終わりではなく、この貴重な経験をまわりに伝えていって下さい。そして、長期的なボランティアになっていただきたいと思います。

## **小野寺正信（宮城県石巻市大原浜大原行政区代表）**

皆さんこんにちは。8月23日、24日大原浜行政区にボランティア活動いただきありがとうございました。さすが福岡大学派遣隊でしたね。

一人ひとりの何かをしてやると言う気持ちがすべての事前研修からあらわれたと思います。何人かの方々と話をしましたがそれなりにみなさんの思いが感じられました。自分にも、大原浜にも元気をもらいました。行政も一丸となってがんばってます。有意義な学生生活を送って下さい。

みなさん、ほんとうにありがとうございます。

まずは、御礼の文面とさせていただきます。

## **戸羽忠夫（旧広田水産高校仮設住宅自治会 副会長）**

朝夕めっきり冷えこんできました。陸前高田市字大久保百124-1仮設住宅に入居している戸羽忠夫です。福岡大学派遣隊員の皆さんお変わりございませんか。大学関係者の方々には大変お世話になりました。皆さんが広田町にボランティア活動にお出でになったときは、夏の暑い盛りの日でした（8月22日・23日・24日）。

FD「福岡大学学園通信」の中で松山哲男教授が力説しているとおり、大学では学習できないことをボランティア活動の中で初体験の作業等を通じて、自分の目線で見て泥と汗臭の中で体感したことが今後の人生の中で大きな財産になることだと思います。また、人は自然災害の中では助け合いの心（絆）がなければ生きられません。また、震災発生により、食料・水・電気・油（燃料）・医薬品の入手や通信網（固定電話、携帯電話、テレビ）による情報の入手が困難となり、昭和初期の年代にタイムスリップした状況でした。

どうか自然災害を甘く見ないで下さい。天災の恐ろしさと天災に対する普段の備え「備えあれば憂いなし」を怠ってはならないと思います。また、学生さんは住民との対話の中で大切なことを受けとめたと思います。九州福岡の遠方より東北岩手へ約三日間かけてバスで来られた皆さんには、頭の下がる思いです。心より感謝いたします。有り難うございました。

東日本大震災発生から8ヵ月が過ぎようとしています。今は仮設住宅の住民とのコミュニケーションとボランティアとの対話を心がけています。特に、仮設住宅でのひきこもりをなくしていくこと。これから冬の季節に入り、火災等の予防に取り組むこと。また、一人暮らしの方も20世帯ほどいますので、できるだけ声かけや安否確認を行っています。今でも、全国津々浦々より物資等が届けられありがたく思っています。その中で住民への配布については、高齢者と子どもたちを優先にしています。その後は年齢を下げて配っています。この件については、特に心配りが大切です。

最後になりますが、私ごとで申し訳ありません。仮設住宅に3歳～90歳まで8人で生活しています。家族全員無事でしたが、この度の大津波で自宅、漁船、作業場等を流失しました。しかし命あっての人生です。どうか地震、津波等の災害が発生したときは、すぐに行動に移して下さい。これが最善と考えています。どうか今後とも福岡大学との絆を大切にしたいと思いますので、よろしくお願ひします。福岡大学の「深」の精神が育成されることを願っています。

## 阿部由紀（宮城県石巻市災害ボランティアセンター）

今回の震災で、全国各地から石巻に来ていただき、様々なボランティア活動が展開されました。

各社会福祉協議会は、災害ボランティアセンターの設置及び運営に向けて活動し、被災住民の支援を行ってきました。被災地の様々な環境下でのボランティア活動を通じ、次世代を担う若者が何を感じ、何を思ったのかは個人的にも興味があります。

人と人との支え合うことの大切さが、本当の意味で分かった気がしていますが、このことをどう表現すればいいのかを考えています。未来に向けて、復興するという強い意志を示し、具体的に伝わるような活動の企画及び実施を住民参画型で行えることを今は思っています。

今後とも石巻のみならず、被災地の歩みを温かい目で見守っていて下さい。

ありがとうございました。



【派遣隊にご支援、ご協力いただいた方々】 (順不同)

福岡市市民局コミュニティ推進部 市民公益活動推進課

NPO・ボランティア支援係長 和田正二郎様

社会福祉法人 福岡市社会福祉協議会ボランティアセンター 所長 松尾 林様

宮城県仙台市 庄司二千夫様、庄司恵子様

岩手県陸前高田市災害ボランティアセンター 安田留美様

宮城県陸前高田市 前広田湾漁協監事 佐藤榮藏様

宮城県陸前高田市 旧広田水産高校仮設住宅自治会 副会長 戸羽忠夫様

宮城県気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンター 斎藤嘉徳様

宮城県気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンター 鈴木美紀様

宮城県気仙沼市大島外畠 小山由紀子様

宮城県気仙沼市大島磯草 小山 久様

宮城県気仙沼市大島田尻 菅原正示様

宮城県気仙沼市大島長崎 村上敬士様

宮城県南三陸町災害ボランティアセンター様

東京ボランティア・市民活動センター 根本宣廣様

宮城県本吉郡南三陸町 上山八幡宮 宮司 工藤祐允様

宮城県本吉郡南三陸町 南三陸ホテル観洋様

F.K.Arms リーダー 佐多俊孝様

医療法人ひのでクリニック 院長 中村幸泰様

宮城県石巻市災害ボランティアセンター 阿部由紀様

宮城県石巻市北上総合支所 災害廃棄物対策室 室長 今野政明様

宮城県石巻市大原浜大原行政区代表 小野寺正信様

宮城県石巻市有限会社ヤマユ佐勇水産 佐藤央子様、佐藤ゆりか様

石巻専修大学 学長 坂田 隆様

石巻専修大学 経済学部 准教授 李 東勲様

石巻専修大学 事務部事務課 課長 佐藤彰桂様

石巻専修大学 事務部事務課 掛長 菅野定義様

石巻専修大学 ボランティアサークル「ネクスト」様

第一薬科大学付属高等学校様

有限会社九州ヘルメット工業所様

R K B毎日放送株式会社様

福岡県警察本部様

福岡市消防局西消防署様

福岡市消防局西消防署警備課 森田浩章様

福岡市消防局 道面勝之様、平嶋輝彰様、寺田和樹様、田村隼人様、野口麻衣様

書家 吉田真紀様

トップツアーブル式会社 福岡支店様

ダイイチユニカ株式会社様

株式会社エフ・ユー・プロテクション様

福岡大学関係

人文学部教育・臨床心理学科 教授 林 幹男様

工学部社会デザイン工学科 准教授 渡辺 浩様

スポーツ科学部健康運動科学科 4年次生 落合春陽様

工学部社会デザイン工学科 4年次生 中堀祥太様

工学部社会デザイン工学科 3年次生 岡田進之助様

福岡大学病院、福岡大学筑紫病院、健康管理センター、エクステンションセンター、

入学センター、広報課、大学史資料室

※ このほか多くの方々のご協力をいただきました。謹んで御礼申し上げます。

## 謝 辞

本報告書は、東日本災害ボランティア「福岡大学派遣隊」の活動報告をまとめたものです。福岡大学東日本大震災支援対策本部長の衛藤卓也学長をはじめとする本部役員の方々には、この活動に終始ご支援をいただきました。また、この報告書は派遣隊の隊員および活動中にご支援いただいた多くの関係者からのご寄稿によって完成しました。編集作業には多くの隊員有志も加わっています。

振り返ってみると、派遣隊の母集団形成から様々な事前研修を経て被災地での活動、そして報告会まで共に学び、たくさんの体験を共有するなかで、学生が得た成果は非常に大きいことを改めて実感しました。その背景には活動前の準備や現地での活動の過程で、多くの協力者の温かいご支援がありました。今後も学生自身がもっている力を信じ、教職員と学生が協力しながら学びあえる場や支援する体制を作っていくたいと思います。

本派遣隊の趣旨にご理解をいただき、快く協力していただいた多くの関係者の皆様に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、この度の東日本大震災によりお亡くなりになられた多くの方々のご冥福と、一日も早い被災地の復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

東日本災害ボランティア「福岡大学派遣隊」一同

---

**平成23年度 東日本災害ボランティア  
「福岡大学派遣隊」活動報告書**

平成24年2月 発行

発 行 福岡大学学生部学生課  
福岡市城南区七隈八丁目19番1号  
TEL 092-871-6631 FAX 092-873-2981

編 集 枇山哲男、川口修一、古川智実、森 寿治、  
上原伊代、福重達也、八尋政哉、田畠信弥、  
月野愛美、平田香純、田中遼平、小嶋洋平、  
江藤 俊、津秋寛之、近藤俊輔

印刷所 城島印刷 株式会社  
〒810-0012 福岡市中央区白金9丁目9-6  
TEL 092-531-7102 FAX 092-524-4411

---



人をつくり、時代を拓く。  
福岡大学